配層そのものが大幅にかわったわけではなかったが、「里甲制」への移行時に漢族の居住区に近いチャン族が漢族の戸籍で登録され、その居住区が「漢民里」に編成されていったためにチャン族全体の人口が激減した。例えば茂州では26の「里」の下に200余の「甲」が設けられたが、もともと漢族で構成されていた2つの「漢民里」以外に、新たにチャン族の居住地であった隴東・蓬族・隴木・静州・岳希・新民・広民の7つが「漢民里」とされた。同様のことは茂州東部の土門区や漢族地区と隣接していた北川県でも行われた。これらの地域のチャン族はこれ以来漢族をなのることになったが、その後の100年の間に服装や習俗などに漢族の影響を深く受け、チャン語は老人しか話せないという集落もでた［冉光栄・李紹明・周錫銀 1985：252-255］。これらの「漢民」が、1980～1990 年代に村落で民族改正を行った人々である。

（4）　人民共和国成立から1990年代まで

1950年代以降は、国家の様々な政策、例えば民族識別、大躍進や文化大革命、計画出産、少数民族優遇政策などが人口の変化に大きく関与している（図4）。

人民解放軍がチャン族地区に入り、人民政府が各県に樹立されたのは1950年のことである。そこでまず行われたのは全区規模での民族の人口調査、「民族識別」である。その結果、1952年には65464人であった総人口が、1953年には約3万人減って35660人になった。これにはつぎのような背景がある。チャン族は東と南を漢族に、西と北をチベット族に囲まれて歴史的に両民族との接触が長かったために、隣接地帯の住民には言語や習俗、衣服などにおいて強い「漢化」あるいは「チベット化」の傾向がみられた。1953年に減少したのは、主に黒水県のチャン族23600人がチベット族に変更されたことによる。

黒水県のチャン族は1952年には24000人で、県総人口の94パーセントを占めていた。しかし1953年に大部分がチベット族となり、1980年には92人、1990年は373人にすぎない（図5）。蘆花（現在の黒水県）は、蘆花鎮を境に黒水河上流域がアムド・チベット族やギャロン・チベット族、チャン族の雑居区で、黒水河下流域の麻窩・木蘇・維古・龍壩・石碉楼・瓦布梁子の7郷がチャン族居住区であった。しかし一帯は明代の成化年間から清末まで西に隣接する索磨のギャロン・チベット族の土司に支配され、さらに民国時代には4人のギャロン・チベット族の「頭人」によって55「溝」（当時の基本的な行政単位）に分けて統治されていた。その結果、このうちの48「溝」に居住していたチャン族はチベット仏教を深く信奉し、習俗や衣服などにおいて「チベット化」されていた。彼らはチャン語北部方言を使用し、隣接する茂県雅都郷赤不蘇のチャン族と長く通婚していながら、自分たちはチベット族であるという意識をもっていた。そこで民族識別が行われた時に、黒水のチャン族は自らをチベット族であると申請した［西南民族学院民族研究所編 1984b：6-7］。

しかしチャン族の人口は、1953年以降は増加が顕著である。1953年を100とすると1982

年には2.9倍、1990年は1982年の1.9倍、2000年には1990年の1.5倍に増加した。自然増加の場合の110～120をかなり上回っており、1990年からの10年間の増加率は55少数民族のなかで最も高い。すなわちこのような人口増加は、出生率の向上と死亡率の低下による自然増加だけではなく、「民族回帰」とよばれる民族出自の回復と変更による人為的増加の要因が大きい。この約40年間の増加総数19万2592人のうち自然増加が約6万4200人で全体の39パーセント、人為的増加は約9万8370人で61パーセントを占める。また民族改正による増加が増加総数に占める比率は、1953年が33.02パーセント、1964年24.87パーセント、1982年52.63パーセント、1990年79.22パーセントで、1980年代を境に「民族回帰」による増加が人口増の主な要因であったことは明らかである[王瑞玉・張朴 1992：117-119]。1978年の中共第11期3中全会で少数民族優遇策が決定されて計画生育や進学、参軍、就職、生産援助、税収などの諸方面における少数民族への優遇政策がうちだされ、1981年には関係部門から民族変更の手続きに関する通知がだされて政府が積極的に民族変更を奨励したことは、チャン族の人口増加に大きな役割を果たしたといえよう。

ただし「民族回帰」の申告はチャン族地区全体で一様にみられるのではなく、北川県と茂県に集中する動きである。

北川県の場合はつぎのようである。北川県のチャン族の総人口は1953年には不詳、1980年には2570人であったが、わずか10年間に約23倍の58116人になった。1982～1989年1月には42878人が漢族からチャン族に変わり、52842人が「北川県少数民族証明書」を手にした［王瑞玉・張朴 1992：118］（図 6）。これにはつぎのような歴史的背景があった。北川県は元来、チャン族地区としては最東端に位置しており、漢族地区と隣接していた。宋代には石泉土司の所轄地となったが、チャン族はたびたび時の王朝に反旗を翻してきた。特に北川河上流の白草のチャン族は東路の羌族の中で最強といわれるほど闘争的な集団として知られ、明清代には中国王朝の支配を拒んでたびたび戦って敗れた。明代の嘉靖26年（1547）には47寨を攻め落とされて693人が殺され、万暦7年（1579）までにはたびたびの戦闘によって約15000人が死んだ。そこで清朝は当地に漢族の移入をすすめ、清代中期には石泉土司を廃止して当地のチャン族を漢族とし、一帯を「漢民里」に編入した［冉光栄・李紹明・周錫銀 1985：237-239］。1991年8月の北川河最上流の青片郷（2837人・610戸）での調査では、当郷は北川県でもかなり奥に位置しておりほぼ全員がチャン族という地域であったが、日常会話はすべて漢語で行われ、チャン語は老人のみが理解する言葉であった。聞けば、1950年代初期にはすでに40歳以下の者はチャン語できなかったといい、民国初期にはすでに漢語が日常語であったと思われる。また北川には東の安県から漢族のアヘン商人がたびたび来ていた。当時の安県は、南の灌県とならぶ「煙幇」（アヘン運搬業者）の根拠地であったために、北川は「煙幇」と結び付いた「哥老会」[3]がチャン族地域の中でも最も浸透した地域であった。古老の話によれば、当時はもめごとがあれば

必ず「大爺」に相談したという。このように北川のチャン族は漢族との接触や雑居が 200 年以上にも及び、漢族の中には現地で結婚して定着する者も少なくなかったと思われる。そのため言語のみならず、服装や年中行事、習俗など諸各方面においてチャン族的要素と漢族的要素の融合がみられる。ただし住民の話では、1989 年までに漢族からチャン族に民族を変更した中には、漢族でありながら偽の申告をした者も少なくないという。

茂県は総人口の約 86 パーセントをチャン族が占めている（1990）。人口の増加は 1950 年と 1978 年以降に際立っており、漢族がその時期に半減しているのと対照的である。しかも 1982 年までの増加人口 40905 人のうち 38 パーセントにあたる 16000 人が民族変更による（図 7）。茂県では鳳儀鎮やそれより東の地域が清代の改土帰流の時に「漢民里」とされたために、そこに属する土門区のチャン族は 1954 年にはまだ漢族であった。またかつては歴史的に少数民族に対する蔑視が存在していたために、漢族と偽って登録するチャン族も少なくなかった。彼らは 1958 年に茂文羌族自治県[4]が成立した時に共産党政府の指導を受けてようやく民族出自を回復した［四川省阿壩藏族羌族自治州茂汶羌族自治県地方志編纂委員会編 1997：115］。

汶川県や理県においても、人口増加は 1980 年代から顕著である。ただし茂県や北川県とは地理的、歴史的条件がやや異なるために、その変化にもやや違った様相がみられる。

理県は、清代には複数の民族が雑居する地域であった。ただし民族別の住みわけははっきりしており、西から順に「三番」「四土」にチベット族、「九枯」「十寨」にチャン族、「五屯」にチャン族と漢族、「六里」に漢族が居住していた。

県の総人口は 1952 年から 30 年間に倍増した。しかしチベット族とチャン族が 1864 年から 1982 年にかけて 72.24 パーセント、69.5 パーセントの増加を示しているのに対して、漢族は 1953～1964 年に約 3 倍に増加した後、1982 年には 22.2 パーセント減、1990 年にはさらに半減している。その結果、漢族と少数民族の人口比率は、1964 年に 5：4 であったのが、1990 年には 1：3 に大きく逆転している（図 8）。漢族の激減の主な理由は、1964 年に外地から朴頭郷に来ていた道路工事隊が 1965 年に全員いなくなり、川西林業局の一部もよそへ行ったからである。また少数民族増加の理由は、1978 年以降の少数民族優遇政策を受けて、少数民族と漢族の夫婦から生まれた子どもがかつては漢族と登録していたのが少数民族に改正したこと、一人っ子政策が少数民族に対しては緩やかで、第 1 子が 3 歳になったら 2 人まで認められ、さらに高山や辺境地区では 3 人まで許されたことによるとする［四川省理県志編纂委員会編 1997：140-141］。

汶川県は、漢族地区からチベット族やチャン族地区への交通の要衝に位置している。そのため清末に内地の人口が増大した時に開墾や商売を理由に大量の漢族が流入し、人口が激増した（図 9）。また漢族の中には地元の少数民族の家庭に婿入りする者も少なくなく、その子孫は漢族をなのった。その結果、元来はチャン族居住地であったのが、1949 年には

漢族が総人口の 72.03 パーセントを占めるまでになった。

人民共和国成立以降は、1959～1960 年に大躍進政策下で鉄の製錬や鉱山労働に従事する非農業人口が漢族を主体に約 5 倍に増加したが、1962 年には非農業人口の圧縮政策をうけて約 40 パーセント減少した。またこの時期には総人口における自然増加率もマイナスに転じ、1961 年は－21.3 パーセントであった。しかしその後は漢族がほぼ横ばいであるのに対して少数民族は増加し続けている。なかでも 1980 年以降のチャン族の伸びが顕著で、平均の自然増加率 11 パーセントを 5 パーセント余り超えているのは、一人っ子政策の違いが影響しているものと考えられる。1959～1985 年までに、漢族は総人口に占める比率が約 10 パーセント減で 61.88 パーセントまで低下したのに対して、チャン族は 19.90 パーセントから 26.18 パーセントまで上昇しており、今後もこの傾向は続くものと思われる。

以上のように、チャン族の人口は地域によって推移の状況が異なるが、全体として増加の傾向が他の少数民族と比べても顕著であり、特に民族変更による北川県の激増がめだっている（図 10)。またこのことは、彼らの民族としての所属が「民族識別」や少数民族優遇政策などの国家の政策的要因に大きく影響されてきたことを示している。今後、チャン族としてのアイデンティティが民族変更を経てどのように形成されていくのか、興味深いテーマである。

2．川西滇北地区の自然環境

地形　川西滇北地区[5]は、高原・高山に代表される山地とそれらに開析された峡谷・盆地から構成される[6]。全体に海抜高度が非常に高く、地区全体の面積の 55.6 パーセントが海抜高度 3300 メートルを超えている。また南から北に、東から西に向かって海抜高度が上昇している［中国科学院地理研究所西部地区南水北調総合考察隊編輯 1966：9］（図 11)。つぎの 3 つに区分される。

第 1 は、青藏高原に連なる高原・高山で、海抜高度 3300 メートル以上の高地が全体の 71 パーセントを占め（表 2)、北西端は海抜高度が 4000 メートルをはるかに越え、人間の居住限界に近い。ヤギ・ヒツジなどの遊牧が生業の中心である。西から順にサルウィン川上流の怒江、メコン川上流の瀾滄江、長江上流の金沙江などの大河川、および横断山脈を構成する連山がほぼ南北に走向しており、「横断山区」と称されている。

第 2 は、阿壩藏族羌族自治州を中心とした北西部地域である。平均海抜高度は第 1 の地域よりも約 1000 メートル低い。長江水系の上流支流の諸河川によって険しい峡谷が開析され、川西滇北地区の典型的な「山高く谷深い」[7]地形である。生業形態は海抜高度によって異なり、山腹斜面の、中腹から山頂一帯にかけては遊牧、中腹以下では斜面を中心にチンクー麦などの栽培を中心とした農業が展開されている。

第3は、西南部を中心とする西昌・麗江両地域で、海抜高度2400メートル未満の土地が73パーセントを占め（表2）、四川盆地に連続している。盆地西部の山間部では、水稲栽培のほか養蚕なども盛んである。

気候　川西滇北地区は、東および南部に聳えた山脈が海洋からもたらされる高温・湿潤な季節風を大きく遮断しているため、海洋からの影響はあまりみられない。また東部の秦嶺・大巴両山脈によって冬季のシベリア・モンゴル上空からの寒波もさえぎられるため、大陸内陸部に位置するわりには比較的温暖である。しかし海抜高度の違いによって気温の相違が明確で、平均年間日照時間や平均気温・摂氏10度以上の積算温度・同左の年間延日数・年間平均無霜日数・年間総降水量も異なる（表3）。川西滇北地区は典型的な「山地垂直気候帯」であり、7つの気候帯に分けられる[8]（図12）。

Ⅰ　高山寒帯　川西滇北地区の北西端にみられる。年間平均気温が摂氏0度以下で、最暖月である7月の平均気温でさえ10度を越えることはない。しかも年中降霜があり、無霜期間は皆無である。樹木はまったく存在せず、夏季のごく短期間に限って植物がみられる。この夏季にのみ生育する草を求めて、チベット高原特産のヤクあるいはヒツジの放牧が一部地域で実施されている。人口も非常に少なく、永住している者は稀である。

Ⅱ　高山亜寒帯　夏季の日平均気温が5度を越え、「生長期」[9]が年内の約3分の1に相当する100日前後存在する。年間の無霜期間は約20日、最暖月7月の平均気温は4～5度年間の総降水量は650～850ミリメートルである。川西滇北地区の最耐寒作物であり、主食にもなっている春播き秋収穫のチンク一麦は、この気候帯では一般に栽培が困難であるが、海抜高度が比較的低い地域では栽培が可能である。また多種類の野菜・飼料作物が夏季を中心に栽培可能であることから、放牧を中心とする牧畜業が発達している。家畜の大半は「牦牛」である。「牦牛」は、ヤクのメスと「黄牛」（日本のあか牛）のオスとの第1代の雑雑である。なお、一部の河谷流域か斜面ではヤギの放牧も行われている。

Ⅲ　山地寒温帯　この気候区では、気温および降水量に比較的恵まれている。4月以降は日平均気温が5度を越え、6月下旬から7月上旬には日平均気温が12度以上に達する。年間総降水量は600～800ミリメートルである。農業では、春播き秋収穫のチンク一麦、春小麦、エンドウマメなどの麦類・豆類が主として栽培されている。さらに、区内の海抜高度の低い地域では夏季の平均気温が15度を越えることもあり、ジャガイモ、ソバ、ソラマメなども栽培可能である。しかしながら海抜高度が高い地域を中心に低温と降霜の異常気象が毎年のように発生し、作物の栽培に大きな被害をもたらしている。牧畜業も盛んで、ヤク、「牦牛」、ヒツジ、馬、「黄牛」などの家畜が放牧されている。

Ⅳ　山地涼温帯　該当地域は、長江など大河川上流の支流によって開析された大峡谷と高原地帯との中間帯である。そのため山地と称しても海抜高度が比較的低く、気温はさらに暖かくなり居住条件が良くなる。日平均気温が10度を越える日数は160～180日にまで増

加し、6～8 月の夏季の月平均気温は 15 度を越え、最高月（7 月）の平均気温は 16・17 度にも達する。当地区の主食であるトウモロコシ、春播き秋収穫の麦類などの栽培が盛んである。しかも 3 月中旬では日平均気温が 5 度前後もあり、2 毛作が可能で、裏作として麦類を栽培することが多い。年間総降水量は 650～950 ミリメートルであるが、降雨期間が限定されため、乾季の 3～5 月にかけては、灌漑設備が完備していない地域での耕作は旱魃の影響を受けやすく、収穫が不安定となることが多い。

Ⅴ　山地暖温帯　山地涼温帯周辺の海抜高度がより低い地域が主体で、雅礱江や金沙江流域と涼山・西昌・麗江地区の大部分が該当する。日平均気温 10 度以上の日数が年間の 3 分の 2 近くの 210～240 日間もある。4 月中旬からは日平均気温が 15 度以上と急上昇し、7・8 月の夏季には日平均気温が 20 度を越えることも稀ではない。年間の総降水量は 500～1000 ミリメートルで、夏季に集中する。灌漑設備さえ整っていれば、水稲、各種の麦類、トウモロコシの栽培が可能である。主要な分布地域は、川西滇北地区の東西にみられる峡谷に集中している。峡谷側壁の斜面には、一部では草などが繁茂し家畜の飼料となっているが、大部分の側壁では岩石が露出しているので高原地帯ほど牧畜業は盛んではない。「黄牛」、ヤギ、ブタなどが家畜として飼育され、頭数も多い。気候区内の比較的冷涼な地域では量的には少ないが「牦牛」が、また比較的暖かい地域では「犏牛」の飼育が中心となっている。

Ⅵ　河谷亜熱帯上帯　山地暖温帯を流れる大河川の下流域がこの気候区の中心である。月平均気温はかなり高く、15 度を越える日数は年間の約半数の 150～180 日間、5 度以上は 320 日間もある。また無霜期間は年間 250～300 日にも及ぶ。気象条件に恵まれているため、主食となる水稲、ムギ類、ソバ、イモ類や、綿花をはじめとする多くの作物が栽培されている。年間の総降水量は 750～1200 ミリメートルで、区内の東部および西部に多量の降雨が集中する。1 年 3 毛作あるいは 2 年 5 毛作が一般に行われている栽培パターンの基本である。家畜としては水牛が最も多く飼育されている。

Ⅶ　河谷亜熱帯下帯　この気候区の中心は金沙江流域で、海抜高度が 1200～1300 メートル以下の河谷およびその流域である。気温は最低月の平均でも 10 度を越える。降雨量も多く、大河川にも近いことから、用水に関しては豊富な地域が目立つ。水稲 2 期作も可能で、コーヒー、キャッサバ、コショウ、綿花など熱帯性作物の栽培もみられる。

以上の 7 つの気候帯にみられる主要な作物と積算温度との関係を示したのが図 13 である。この図 13 からも温度を中心とする気候条件が、この地区の作物栽培に大きく関係しているといえる。

３．生業

（１）伝統的な農業生産

チャン族の伝統的な経済活動は、農業生産と家畜の飼育によって食糧を自給し、家計の不足を副業によって補うというものである。現在は、農業を主とするという形態はそのままであるが、農業生産、家畜、副業それぞれにおいて内容が多様化している。1995 年の統計によれば、チャン族の総人口に占める農業人口の割合は 91.4 パーセントで、県別の農業人口の割合も、茂県、理県、丹巴県、松潘県、北川県のいずれも 80 パーセントを越える。ただし交通の要衝にあって商店などのサービス業の発展が著しい汶川県だけは農業人口は全県人口の 67.3 パーセントまで低下しており、この数値は省都の馬爾康なみである［四川省統計局 1996：39］。以下では、この 100 年あまりにおける変化の状況と要因を農業生産とその他の経済活動に分けて考察する。

農業生産においては、畝あたりの生産高や栽培作物の種類に大きな変化がみられる。例えば茂県では、主作物であるトウモロコシは畝あたりの生産量が 1949 年は 176 斤にすぎなかったが、1982 年には 500 斤に増え、品種改良の結果、1000 斤以上の収穫も期待できるようになった。また 1940 年代までは多くの地域で 1 年間のうち常に 2～5 ヵ月分が不足していたとされるが、1958 年には 1 人あたりの食糧が 848 斤になってほぼ自給が可能になった。1970 年に 611 斤に減少したものの、1982 年には 939 斤まで回復した。1980 年代中期には余剰の穀物を売って現金収入を得るまでになった［茂汶羌族自治県概況編写組 1985：90-96］。

かつて主食はチンクー麦やソバであったが、1950 年代にはトウモロコシの主食が普及した。さらに 1990 年代以降は、サンショウやリンゴ、「白雲豆」あるいはトウモロコシなどを売って飯米を購入するようになり、多くの地域で、ハレの日のごちそうであった米飯をほぼ毎日口にできるようになった。

栽培作物については、主作物、経済作物ともに大きく変化した。主作物は、かつてはチンクー麦やソバ、コムギであったが、19 世紀半ばにチャン族地区にもトウモロコシや新種のジャガイモが伝えられると、それらはやがて茂県県城以北の高山地区を除くほぼ全地域に普及した。トウモロコシや新種のジャガイモは、畝あたりの生産高がチンクー麦のそれの数倍もあったからである。以来、1 等地にはトウモロコシを栽培して大豆を間作し、2 等地にはジャガイモやエンバク、焼き畑にはソバを栽培するという形態が定着した[10]。現在でも、寒冷なためにトウモロコシを栽培できない一部の高山地区以外ではトウモロコシが主作物である。しかしその栽培面積は減少の傾向にある。「白雲豆」やサンショウ、リンゴ、白菜などの換金作物の栽培に成功した地域では、トウモロコシを自家の飼料用の生産範囲にとどめて換金作物の栽培面積を増やし、主食はすべて購入した米あるいはコムギな

どでまかなうという家庭が現れている。そのような家庭では、食糧の自給という従来の意識からはすでに大きく転換している。

経済作物は、人民共和国成立以前は大麻が主であった［西南民族学院民族研究所編 1954a］。大麻は、各家庭で平均して数畝が栽培され、家内の副業として女性たちによって糸にされ、布に織られた。麻布は行商人が持ってきた塩や日用品などと交換され、あるいは県城に持っていって売った。しかし20世紀の初めにアヘンの原料となるケシが当地で栽培されるようになると、利潤が極めて大きかったことからまたたくまに広がり、経済作物の第一となった[11]。1930～1940年代には栽培が最も盛んになり、ほぼ全地域で耕地の半分以上がケシ畑になった。そしてアヘンは通貨として通用されるようになり、結婚の結納金や税金もアヘンで支払われた。また茂県渭門郷永和村では、アヘン1銭は1斗のトウモロコシと交換されたが、それは茂県から松潘まで15日かけて70斤の茶包を運ぶ賃金に相当した。また北川県青片郷尚武村ではアヘン1両（＝10銭）は子ブタ1匹、100斤のトウモロコシ、10斤の塩と交換された。しかしケシ栽培の拡大は食糧生産の激減をまねき、多量の食糧が綿竹や灌県などの漢族地区から購入された。またアヘンの常飲者が増えて成人男性が働けなくなり、アヘン購入のための借金で家庭経済が破壊された。ケシの栽培が実際に禁止されるに至ったのはようやく人民共和国成立後であり、沙壩以南の地域では1952年、黒水県周辺では1953年であった。

1950年代以降の主な経済作物は、サンショウやリンゴである。近年は「白雲豆」の栽培も奨励されている。このうちサンショウは、すでに清代の光緒年間（1875～1908）に特産品として知られており、「茂州椒」とよばれて成都方面に出荷されていた[12]［四川省編輯組 1986：5］。しかし品種や技術面に限界があったために大幅な生産増や全地域への普及は難しく、大規模な栽培が試みられたのは人民公社になってからである。例えば茂県宗渠村では、粗放経営のために約30年間生産量が増加しなかった。1974年に2種の接ぎ木法が開発され、1株あたりの収穫量が従来の10倍の1斤（＝9元）に達してはじめて商品作物として定着するようになった［文定選 1988：43-45］。

戸別生産請負制導入後は、人民公社時代にすでに栽培していた地域をはじめとして、その他の地域へも政府が財政的な援助を実施したため、作付け面積および収穫量が増大した。例えば茂県渭門郷永和村では人民公社解体後、いちはやくサンショウの生産増強に努めたために1980年代後半には安定した生産が可能になり、全村的に収入が増えて年間収入が1万元を越える「万元戸」が何軒も出現した。理県蒲渓郷では苗木1本につき代金の3分の1が政府によって補助され、作付け面積が拡大した。しかしサンショウは海抜2000メートル以上の地域では栽培に適さないために、地域によって大きな収入格差をうんでいる。蒲渓郷では、河谷集落では栽培に成功して各家庭に年間平均数千元の現金収入をもたらすようになり、出稼ぎが激減した。しかし山腹集落では栽培に不適であったために、依然とし

て農閑期には男性の出稼ぎが行われている。

以上によれば、農業生産における変化は、主に外部からのつぎのような要因が大きく関与していると考えられる。第1は、トウモロコシや新種のジャガイモ、ケシ、リンゴなどの新作物が外来の漢族によって伝えられたことである。このうちトウモロコシとジャガイモは当地に移住してきた漢族農民によってもたらされた。トウモロコシは従来のチンクー麦に変わって主食となり、当地区における食糧の自給自足を可能にした。またケシは高収入をもたらしたが、アヘンがチャン族の中でも常習されるようになると労働力の激減や家庭経済の破壊などの弊害をまねき、1950 年代には全面的に栽培禁止となった。リンゴは1950 年代に漢族によって当地にもたらされ、現在では品種改良をへて大きな現金収入源となっている。

第2は、人民共和国下で政府の主導によって様々な政策が推進されたことである。まず農村における集団化によって 1950 年代後半から開始された大々的な農地開発や土壌改良は、山間の限られた耕地面積を拡大し、「九石一土」[13] とよばれた土地を耕地にかえた。また「一種、二肥、三双改、四抗災」政策は、優良品種の普及、肥料の増量、緑肥を間作することで地力を増し、1年に2回の収穫をめざす、10年のうち9回は旱魃に遇うという気候に備えるために冬季の水量を小麦に含ませて春に利用するなどの新技術を導入するもので、その指導員の養成も行われ、多くの地域で食糧の自給を可能にした。さらに生産責任制導入以降は、家庭単位の生産意欲が高まり、郷人民政府による「地膜覆蓋」などの新技術の奨励や化学肥料の援助などが積極的に進められた結果、経済作物の生産が増加して農業生産による現金収入が増えている。また理県蒲渓郷では、開墾地については1畝あたり 200 元の奨励金が出されている。しかし生産単位の戸別化は家庭内の労働力の寡多による収入格差、すなわち同一集落内での新たな貧富の差をうむ要因ともなっている。特に家庭内に農業以外の職業を専業的にもつ者がいる場合、例えば私有のトラックによって運輸業を行う者は年間収入が1万元をこえる場合が少なくない。また寒冷な高山地区は自然条件がサンショウやリンゴなどの経済作物の生産に適さないために農業生産による収入の増加が期待できず、河谷地区との経済的格差が大きくなっている。

（2）　家畜の飼育と出稼ぎ

家畜の飼育については、従来の自給自足型からの変化がみられる。それはまずヤギの激減という形で現れている。ヤギは、元来、チャン族が自給的な生活を維持するためになくてはならない家畜であり、かつては各戸が平均して 10 匹以上を飼っていた。その用途は広く、糞は燃料や肥料に利用され、皮や毛は衣料に、肉はタンパク源とされ、冠婚葬祭などの儀礼には犠牲として不可欠であった。しかし 1983 年に人民公社が解体されて生産責任制が導入された時にヤギが各戸に分配され、住民は多数のヤギをチベット商人に売り払った。例えば理県蒲渓村では、人民公社解体後の 10 年間におよそ3分の2のヤギが売られた。手

放した主な理由は人手不足だとするが、その背景には、手間をかけてヤギを育てて燃料や衣料を自給するよりは木綿や羊皮などを現金で購入するほうが便利で安くつくことがある。また余剰の労働力がある場合も、出稼ぎで現金収入を得たほうがよいという意識が一般化している。

そこで近年では、ヤギに替わって養豚が奨励されている。ブタは彼らの主要なタンパク源であるばかりでなく、富を表すバロメーターでもある。伝説によれば、チャン族は岷江流域に移住してきて漢族に接した時に初めてブタを手にいれた。以来、ブタは肉や油の主要な供給源であり、糞尿は肥料にし、また毎年春節前に「猪膘」[pis]（ブタの燻製）にして冠婚葬祭時の重要な贈答品として使用する。ブタの飼育は、日に2～3回餌を与えなくてはならず、手間がかかる。飼料は、刈り集めた野草や野菜の残りなどとトウモロコシの実やガラを混ぜて水を加え煮沸して冷やしたもので、1頭につき年間400～800斤のトウモロコシが必要である。また主に自給用であり、臨時の特別出費の場合に限って売られてきたため、商品として良質なものに飼育するという意識はまだそれほど一般化していない。

ウシは、土壌の固い山間の土地で農業生産を行わなければならないチャン族にとって不可欠な家畜である。耕牛は、一般に、南部の河谷地域では「黄牛」であるが、その他の地域では「牦牛」と「黄牛」の交配牛である「犏牛」が使われている。「牦牛」は3000メートル以上の高地で飼育されていて耐寒性や山道の運搬に優れ、「黄牛」は舎飼が可能で耕牛としての能力を備えている。チャン族は、固い土壌を耕すために2頭のウシで1つの犂を引く整地法「二牛抬扛」を用いており、ウシは数戸が2頭以上のウシを共有し、交替で使用するという方法をとってきた。また共有する経済的余裕のない家は、富裕な家から「1駕（2頭）牛」を借り、7～12人分の労働力によって返済した［西南民族学院民族研究所編1984a：67］。よって1980年代初期に人民公社が解体された時には、理県蒲渓村では耕牛は4戸につき2頭の比率で分配された。現在でも「二牛抬扛」は多くの地域で行われており、耕牛は1頭の価格が1000元を越えるために、2頭以上を兄弟親子や親戚知人の複数戸で共有することが多い。また毎年10月1日の「牛王会」を行う理県などでは、この日は牛に1年間の労働を感謝するだけではなく、次年度の耕牛の使用や冬季の委託放牧の負担金などについての話し合いが行われている。

副業については、かつては農閑期に担ぎ人夫や農作業の手伝いなどの出稼ぎ、漢方薬材の採集を行った[14]。しかし近年は、経済作物の栽培に成功した地域では出稼ぎの減少、サンショウやリンゴなどの個人販売がみられ、また高山部に自生する漢方薬材資源が減ってきたことによって薬材採集の収入が低下するなど、地域の条件によって様々な現象が現れている。

かつて出稼ぎは、伝来の石積みの技術をいかした岷江流域の築堤工事人夫や成都盆地を渡り歩く井戸掘り、担ぎ人夫（「揹背子」）、農作業の手伝いなどが主であった。チャン族は

伝統的に居住地域周辺の石を利用して住居や巨大な石塔を造りあげる技術をもっており、それは父から息子に伝えられた。彼らはすでに漢代の頃から冬の農閑期の3ヵ月間、岷江流域の治水工事に参加しており、それは人民共和国成立後の農村集団化が始まるまで続けられた[15]。しかし近年は、伝来の技術も主に近隣で家屋建築する際にいかされるか、チベット族地区に隣接する茂県雅都郷や理県蒲渓郷などで比較的優れた技量をもつ者がチベット族地区へ家屋や寺院の修築のために石工として出かける程度である。

一方、岷江や雑谷脳河に沿った道は北や西のチベット族地区と南の漢族地区を結ぶ交易路であったが、険しい山道であったため、交易路沿いに居住するチャン族や貧しい漢族が背負人夫として物資を運んだ。汶川県雁門郷羅葡村の古老の話によれば、民国30～40年代には全村の成人男女のほぼ全員が担ぎ人夫になった。主に「辺茶」（茶葉を蒸して煉瓦状に固めたもの）を漢族地区から理県や茂県、松潘県に運び、帰りには獣皮や羊毛を持ち帰った。松潘までの約140キロの道のりを往復18～20日間かけて茶包1つ約50斤を運ぶと、賃金は100斤のトウモロコシの代金に相当した。農閑期に4～5人が1グループを作ってでかけ、年間十数回往復する者もいた。また茂県黒虎郷小河壩村の楊永徳（51歳・男性）によれば、当村では民国25～27年（1936～1938）の飢饉の時に一家をあげて茂県や汶川県の比較的豊かな土地に農作業の手伝いにいった。また茶を運ぶ担ぎ人夫をする者も少なくなく、茂県から松潘まで往復に12日かけて5～6銀元の賃金を得た。しかし担ぎ人夫は、1954年に成都と阿壩を結ぶ成阿公路が汶川県威州まで通じ、さらに1955年以降には茂県、松潘までの公道が通じて車での運搬が可能になるにしたがい、廃れた。

このように外地への肉体労働を主とした出稼ぎは、当時最も多く行われた副業であった。しかし中華人民共和国が成立して人民公社化されると出稼ぎは集団として組織され、林営場での材木の伐り出しや道路工事にかりだされた。さらに生産責任制導入後は、当時の伐採の仕事などが個人あるいはグループに引き継がれている。例えば理県の各郷から米亜羅や馬爾康などのチベット族地区への伐採の出稼ぎは、当時のそれを継いだものである。ただし出稼ぎは、経済作物の栽培によって戸別の農業収入が数千元以上に達した地域、例えば渭門郷や理県蒲渓郷河壩村などの多くの家庭ではすでにその必要がなくなっている。

一方、漢方薬材の採集は、近年は資源の減少が深刻である。チャン族が暮らす岷江上流域や隣接するギャロン・チベット族の住む大渡河上流域の高山地区は、古くより有数の漢方薬材の産地として知られていた。採集の時期は種類によって異なり、「貝母」[16]が6月6日から7月半ば、「冬虫夏草」が4月下旬から5月5日で、そのほか農閑期を利用して「羌活」「天麻」「当帰」なども採集され、地元にきた漢族の仲買人に売ったり、行商人の布や塩、日用品などと交換した。また一方で、灌県や内陸の安岳県や楽至県からの薬材採集を目的として漢族が多数、この一帯にやってきて採集を行った。例えば理県蒲渓村には毎年100人以上がやってきたという。さらに北の松潘県や西のギャロン・チベット族地域では

それらの外来の採集夫が「山主」によって組織化されて採集にあたったために、資源は年とともに減少していった。現在では、チャン族地区ではより高山部に行かなければ採算があわず、しかも多い者でも年間数百元の収入にとどまっている。

近年の新たな副業には、トラックによる運搬業や特産のサンショウを持って成都や省内の各都市、あるいは他省へ商売に行く、日用品を売る小規模な商店の開業などがある。特にいち早く経済作物を栽培して多少の蓄えを持つに至った者は、運転技術を学んでトラックを購入し、リンゴやジャガイモ、野菜、木材などを成都方面に運搬し、数万元の収入を得るようになっている。例えば茂県雅都郷中心村のある住民は、1990年代初期に数台のトラックを購入して村人数人を運転手として雇い、数万元の収入を得ている。トッラク運送は、当たれば最も短期間で高収入を得られる新職業であり、専業化の傾向がみられる。若者でこれに従事することを希望する者は少なくなく、チャン族地区における余剰労働力の一部はこれに吸収されている。しかし1990年代後半に始まった「天然林保護」政策は、木材の商業的な伐採を全面的に禁止し、近年、その取締りはますます厳しくなっている。トラック輸送も伐採の出稼ぎも大きな打撃を受けている。

（3） 人・物資の往来

岷江に沿った南の灌県と北の松潘を結ぶ約300キロのルートは、古代より西北への交通路のひとつであり、西北の青海や甘粛、西蔵などの諸地区と内地を結ぶ交易路でもあった。北の松潘では、清代雍正年間（1723～1735）初期の頃から青海の少数民族と内地との交易が毎年2月と8月の2回開かれ、アラブやペルシャの商人もやってきた。

一方、南の灌県は、四川西北の民族地区と内地の漢族との交易の中心地であった。そこには、漢方薬材や皮毛などが少数民族居住地域から集められ、逆に「辺茶」や「斜紋」（綾織りの綿布）、「土布」（手織りの木綿布）などが漢族地区から少数民族居住地域へと運ばれた。

『四川西北辺区墾牧調査報告』［1937］によれば、毎年、民族地区から運ばれる薬材と皮毛は総額414万2500元に達した。このうち薬材が全体の約63パーセント、皮毛が37パーセントである。これに対して漢族地区からの物資は総額29万7000元で、「辺茶」が54パーセント、「斜紋」が30パーセント、「土布」が13パーセント、残りが「清油」であった。

灌県における漢方薬材の収荷と販売はつぎのように行われた。薬材は、各産地から「山客」と呼ばれる行商人によって灌県の薬材問屋に集められ、主に重慶や成都の薬店に卸された。「山客」は、灌県で茶や布、油、酒、たばこなどを仕入れ、山間の集落を回って、それらと現地で採集された薬材とを物々交換した。当時、松理茂懋汶の各県内で活動した「山客」は1000人をくだらなかった。また松潘や理県の産地では、薬材取りの人夫たちが「老板」（漢方薬材採取の人夫を仕切る組織のボス）によって造られた「薬棚」に季節的に所属し、薬材採集に従事した。老板は食料や寝る場所、燃料などを支給し、人夫は採集した薬

材の一部を代金として支払った。人夫の総数は1万人をこえ、その多くは内地の安岳や楽至、遂寧などから来た漢族であった。

薬問屋は、4～5人から10数人規模の店舗が21軒あった。各問屋では、数十人の女性たちが薬材のより分け作業にあたった。問屋は3パーセントの手数料をとって薬店に卸した。薬店（出張所）は大小30あまりあった。そのうち比較的名のとおったものは20軒で、うち80パーセントが重慶、10パーセントが成都、残りが嘉定などの薬店であった。

物資の運搬には、人が背負う、天秤棒で担ぐ、騾馬の背に乗せるなど各種の方法があった。汶川から茂県までは、騾馬は240～250斤の荷を1日に50～60華里（1華里＝0.5キロ）運び、運賃は1日7、8角～1元であった。人夫は120～130斤の荷を1日に30～40華里担ぎ、運賃は500～600文（1角＝2500文）で、狭くて険しい道路を通るのに適していた。騾馬に水や草をあたえて休ませる「馬店」は、ほぼ10華里ごとに設けられた。

ところで松潘―茂県―威州―灌県を結ぶ岷江ルートには、外部との交易路としてさらに2つのルートがある。ひとつは茂県から東の重慶へむかう東路であり、いまひとつは西の雑谷脳、ギャロン・チベット族地区に続く西路である。

このうち東路は、茂県―灌県の南路に比べて道が平坦であったことから、西の少数民族居住区と東の漢族地区を結ぶ最も重要な交易路であった。茂県からは、東へむかって土門、北川、安県まで比較的平らな陸路ですすみ、そこで小さな炭船に乗り換えて綿竹までいき、さらに重慶までの約460キロを再び陸路でいった。取引された主な物資は、チャン族地区から運び出されたものは、漢方薬材の「虫草」が約6万茎、硝石が約20万斤、サンショウが約6万斤、逆ルートで運び入まれたものは、米が約2万石、白糖が約2万斤、黄糖が約3万斤、菜油が約20万斤、毛茶が約5千斤などであった（以上、数字はすべて年間量）。

一方、西路は、漢方薬材を主要な取引物資とするものであった。運搬方法は、人が背負う、あるいは担ぐという場合が9割以上を占める。人夫は、当時の居住状況からみて、茂県・汶川・松潘・理番の籍をもつ者がチャン族（一部ギャロン・チベット族を含む）で、それ以外の灌県・安県出身者などが漢族であろうと推定される。威州以南ではチャン族と漢族の人夫の比率は1：2であるが、以北ではその多くがチャン族である。

このうち漢族の人夫は、それぞれの出身地の特産物を往路で灌県、あるいは茂県まで運んできて、帰路で薬材を持ち帰るという形であったものと思われる。安県方面からは米、曲酒、菜油、鉄器など、崇慶や大邑からは綿布がかなり大量に入荷されている。

チャン族の人夫は、地の利をいかした副業である。例えば茂県の県城まで約10キロという位置にあった渭門郷では、茂県から松潘まで「辺茶」の運搬にあたった。1人あたり1度に70斤の茶の包みを2袋背負い、往復に約15日かけて、4銀元の賃金を得た。当時、4銀元では2斗のトウモロコシが買えた。茂県黒虎郷でも、松潘までの「辺茶」運びをして帰りには羊毛を運び、5～6銀元を得た。作物の収穫が良くない時には、一家で出かけられ

る家族は全員荷担ぎ仕事にいき、春節にはもどった。汶川県雁門郷では、1930年代には、全村の老若男女が茶の運搬の出稼ぎにでた。行き先は理県、茂県、松潘などさまざまで、一包み80斤を1、2袋背負った。松潘までは往復18～20日かかり、一番多い時の賃金で100斤以上のトウモロコシが買えた。帰路には獣皮や羊毛を担いだ。ふだんは農閑期に4、5人がひと組になって出かけた。1年に1人が10数回出ることもあった。途中の食糧や宿泊は自分持ちであったので、飢えや野宿もあり、かなりきつい仕事であった。騾馬を使えたのは、河谷に住む比較的裕福な者だけだった。

チャン族の暮らしは原則として自給自足であった。しかしかつてはほとんどの地域で1年のうち数ヵ月分の食糧が不足し、農閑期を利用してさまざまな副業によって現金収入を得なければならなかった。副業は2種に大別された。ひとつは、家庭および日常の生活圏内内で行うもので、男性ならば「土碱」（天然産ソーダ）や天然産の硝石を煮詰めて精製すること、女性ならば麻布や「毡子」（ヤギ毛の織物）を織ることである。いまひとつは数日あるいは数ヵ月家をあけて外部に出稼ぎにいくことである。山で薪を切って都市へ売りにいく、深山で漢方薬材を採集する、狩猟、荷担ぎ人夫をする、石を積み上げるという伝来の技術をもって成都盆地の各都市へ井戸掘りにいくなどの仕事についた。

このうち出稼ぎは、漢族地区へ行くことが多かったことから、経済的側面ばかりでなく、漢文化との接点と導入という側面も重要である。チャン族が漢族地区から導入したものはさまざまであった。彼らは出稼ぎの帰路に、綿布、鍋や刃物などの鉄製品、子ブタなどを仕入れたり、春節前には米を持ち帰ることもあった。このうちブタは、伝説によれば、チャン族が岷江に定住を始めた頃に「夷都」（成都のこと）で手にいれたと伝えられている。以来、豚肉は貴重なタンパク源として、あるいは儀礼時の不可欠な贈答品や各家庭の富を示すバロメーターとして生活の必需品となった。このほか祭りにおける漢族的要素や道教的な諸神の導入も漢文化の影響の一つである。

近年では、1983年の生産請負制導入や、交通網が整備されるにつれて、サンショウやリンゴ、白菜などの商品作物の栽培や販売が各地で成功し始め、出稼ぎは減少してきている。しかし経済力の増大にともなって、出稼ぎという媒介を経ることなしに外部からの多様な物資や娯楽などが直接に流入し始めた。各家庭では、テレビやラジカセなどの電気製品が普及し、家具や寝具、食器などの新調が目立つようになった。近年の物質面での変化は、半世紀に及ぶ漢語による学校教育とともに、チャン族の生活様式や意識における漢族への同質化を深める大きな要因となっている。

（4） 伝統的な運搬具――溜索・索橋・背負いカゴ（イラスト1、2）

チャン族地区は、険しい連山と激しい流れの河川に囲まれた峡谷地帯に位置している。そのためかつて人や物の往来は、山腹や断崖に沿った狭くて急な傾斜の道を歩くか、馬にたよるしかなかった。しかも道路は雨が降るとしばしば崖崩れをおこし、往来を不能にす

るばかりでなく、そのために多くの家畜が失われた。例えば、1950年の1～4月には威州と茂県を結ぶ約45キロの岷江沿いの道で落石や脚を滑らせるなどの事故にあって失われた家畜は190匹に達している。また居住区を流れる岷江、黒水河、雑谷脳河およびその支流は、早瀬が多く、現在でも船で渡ることができない。1936年の報告によれば、茂県と松潘の間には、浅瀬で流れの速い場所が8ヵ所、砂州が3ヵ所、急流が7ヵ所とある。そのため河をはさんで対峙する集落の中には、一度も対岸に渡ったことのない住民もいる。

当時、河を渡るには「溜索」を使うか、数日かけて迂回し、一番近い「索橋」を渡るしかなかった。「溜索」とは、ケーブルカー式の運搬具である。割り竹をよりあわせて作った縄を、河の両岸に高低をつけてはり、それに「溜索」をつるして人や物、家畜を乗せ、滑らせて運ぶ。「溜索」とは、堅い木材をくりぬいて、筒を半分に割ったような形にしたもので、長さは約1尺、上に穴をあける。河を渡る時は、麻縄か皮帯の一端を「溜索」の穴に通して竹縄につるし、もう一端を腰に結んで体を「溜売」にのせ、傾斜の勢いにのって対岸から向かい岸まで一気にすべりおりる。風に体を大きく揺らされながら、100メートルをこえる河幅の空中をたった1本の縄で滑りおりなければならない。

この「溜索」を橋の形にしたともいえるのが「索橋」である。「縄橋」ともよばれている。まず両岸に2本の柱、あるいは石を積み上げて洞門を造る。竹を割いてよりあわせた太縄を数十本用意し、それらの両端をそれぞれ両岸の柱に繋ぎ、並べてはる。その上に木板を敷きつめ、左右を縄で固定する。橋の両横には欄干をつける。索橋は、横揺れが激しく不安定であるが、彼らは十数キロの荷物を背負い、家畜を引き連れて日常的に往来している。

しかし人民共和国成立後は、状況が一変した。1954年に成都と阿壩県を結ぶ公路が開通し、茂県を中心に北川、松潘、黒水、汶川の4県を結ぶ路線が設けられた。さらに各地の住民は、国家の補助を受けて各郷村までの公路や林区の道路、橋を造り、郷村単位までの交通輸送網が基本的に完成した。それとともにかつての「溜索」は姿をけし、「索橋」の竹縄は鋼鉄線に変わった。また居住区全体には、1976年に開通した茂汶大橋など3つの鉄筋の大橋がかけられた。現在、幹線道路は物資を満載したトラックや定期バスが頻繁に往来している。このような交通手段の変化によってチャン族地区は、省都成都などの都市へ野菜や果物、木材などを大量に供給することのできるようになり、その重要性は次第に高まっている。しかし依然として、この幹線道路には崖崩れの頻発する難所が多く、雨季や凍結時にはしばしば通行不能になる。

チャン族は、物資の運搬のほとんどを人力に依存している。それは、彼らの集落の多くが海抜高度2000メートル前後の山間部に点在しており、麓の郷人民政府のある村までは車で行くことができても、集落までは人と人がようやくすれちがえるほどのつづら折りを上っていかなければならないからである。馬を利用することもあるが、絶対数が少ない。そのため必要な時に借りることが多い。

彼らの人力運搬は、背負いを主とする。背負い具には、日常の暮らしに不可欠なものが2種類ある。水を運ぶ桶と、水以外のあらゆる物品を運ぶカゴである。ともに集落周辺の山中の杉、藤、竹などの樹木を利用して、男性が作る。

水桶は、杉類の細長の木片を円筒状に並べてタガでしめたものである。高さは、女性の身長のおよそ半分の80センチ前後、直径は肩幅ほどで、背になじみやすいようにやや楕円になっている。その背負い方は独特である。牛革のヒモか、フジの蔓を編んだ縄を桶の筒部分の上方にぐるりとかけ、それを両肩と胸にまわす。そして麦藁で直径20センチほどのドーナツ状に編んだ腰当てを腰帯の上に置き、その中央に水桶の底をのせて、そのまま桶がほぼまっすぐになるように体をやや前傾にし、胸で支える。

水汲みは、伝統的に女性の仕事であった。女性は、幼少の頃から毎日1、2回、集落のはずれにある湧き水や小川まで数百メートルの山道を往復しなければならない。しかし近年は、住居近くまで共同の水道を引く集落が増えてきた。その結果、水桶のかわりにブリキのバケツを天秤の両端にさげて担う方法が普及し、男性が水を汲む姿もみられるようになった。

背負いカゴには、従来の先端のとがった型と、最近普及してきた底部の平な型がある。前者は、フジの蔓を縦と横に底部にむかって細くなるように組み上げたものである。高さは80〜100センチ、上縁部は楕円形か長方形で、底部の先端には2本の縦材が交差して突出している。傾斜のきつい道で休む時には、カゴを背負ったまま突出部を支えにして立てる。背負い紐は、1本を上部と下部の4つの穴に通して、両肩で普通に背負う。

このカゴには、収穫物や日用品から、薪やヤギの糞、堆肥用の草や藁などにいたるまで、ほとんどあらゆる物を入れて運ぶ。家族全員が、出かける場合の距離の遠近をとわず、日常の生産活動や社交、儀礼活動などほぼすべての場面に携帯する。このカゴは、集落全体で公的な活動を行う際に各戸あたりの供出物の分量単位として用いられている。例えば、茂県雅都郷では集落内で火葬が行われる時は、各戸はカゴいっぱいの薪を供出する。また家屋の建築の時には、女性はカゴいっぱいの小石を集めて運び、さらに屋上部分の土泥の下に敷く「紫子花」をカゴいっぱいもちよる。

これに対して底部の平らなカゴは、大きさは従来のものと同じであるが、全体が円柱型で、竹製である。道路に平らに置くことができ、品物をそのまま陳列するのに適している。というのは、1983年に生産請負制が導入されて個人の商いが許されるようなると、チャン族は県城の市場や街道沿いに、生産したリンゴやサンショウ、クルミなどをずらっと並べて直接販売するようになったからである。この型のカゴは、商売用として買われ、急速に広まった。都市に近いチャン族のなかには、仕事の合間にこれを作って市販する者も現れている。

４．衣食住

（１）　衣生活（イラスト 3 ～12）

チャン族の伝統的な服装は、基本の型は男女ともにほぼ同じである。一般には、麻や木綿の丈長のひとえを右前に着て、腰帯でとめる。寒くなった時や山仕事に出る時には、山羊皮のベストをはおる。着ものは、男性は膝丈、女性は踝丈くらいまでの長さがある。色は、麻ならば白か黒、木綿は黒か青を地にしたものが多い。頭には黒か白の布をまく。脚にはかつては脚絆をまいて、麻や柳樹皮で編んだ草鞋をはいていた。現在は、ハレの日には刺繍をほどこした布靴をはくが、普段は運動靴が多い。

身に帯びる物は、男性は、ノロの皮で作った三角形の腰袋や父からゆずられた鉄製の火打ち石、キセルなどである。腰袋には自家栽培のたばこ「藍花煙」の葉やモグサを入れる。山に入る時は腰刀や銃をもつ。女性は、銀製の耳飾りや首飾り、腕輪、指輪、かんざしなどを身につける。北部の茂県雅都郷赤不蘇では、チベット族の居住する黒水県との婚姻関係が多いためにメノウや玉石の飾り物も持つ。また母から娘へは直径 6、7 センチの円形の魚骨製首飾りが伝えられるが、これは四川省北東部の白馬チベット族に伝来するものとよく似ている。

服飾における地域差は、女性の頭につける布の形や巻き方、未婚女性のハレ着の違いに表れている。女性は、髪を常に腰のあたりまでの長さに保ち、日常は 2 本あるいは 1 本のおさげに編み、頭上にまきあげて留める。頭の布は、茂県黒虎郷では白い木綿布を馬頭に模って巻く。数百年前に外来の漢族の侵入を防いで戦った「黒虎将軍」の白馬を記念したものと伝える。汶川県羅葡郷では黒布を楕円型に巻く。茂県雅都郷では 20 センチ四方に折り畳んだ黒布を頭上にとめる。中央には多色の糸で模様を刺繍する。未婚女性の晴れ着は、青地の上着の襟口や袖口、腰帯や前掛け、布鞋などに色糸で様々な幾何学模様の刺繍を刺して華やかである。

近年は、近隣の都市に出かけることの多い男性や若者を中心に漢族式の衣服を着る者が増えている。老人や女性はまだかなりの者が伝統的な服装を着用しているが、子供達はほとんどが商店で購入した洋服である。しかし原則として主婦は必ず家族全員の伝統の衣装を作って用意しており、それはハレ着として正式の挨拶に他家を訪れたり、年輩者をたずねる場合、祭りの日などに着用される。

衣料は、かつては麻やヤギの毛を自給していたが、清末頃から木綿が外部から持ち込まれるようになり、現在では木綿が主流である。その変化はつぎのようである［四川省編輯組 1986：30-42］。

かつてチャン族の各家庭には、必ず麻を栽培する畑があり、少なくとも十数匹のヤギが飼育されていた。しかし清末民初の頃になると、当地の特産品である漢方薬材やアヘンの

交換物として「土布」が漢族地区から運ばれてくるようになった。「土布」とは、幅の狭い、目の粗い手織りの木綿布である。これは1930年代頃から機械織りの「洋布」入ってくるまでは、茂州や威州（汶川県）、薛城（理県）の市場で最も大量に取引された品物であった。

茂県城西郷の余保全の話によれば、清代の同治の頃（1862～1874）、当時、茂州一帯では麻布の衣服を着る者がまだ多かった。しかし糸繰りから1枚の服を織り上げるまでには数ヵ月の手間がかかった。そこで州城周辺の住民は、麻布を織る時間を薬材採集などの副業にまわして現金収入を得、その収入の一部で麻衣を城内の市で買うようになった。そして彼らのために麻布を提供したのが、州城から西へ50～60キロ以上離れた赤不蘇や黒虎のチャン族であった。赤不蘇や黒虎の住民は、茂州城内に来て麻布や漢方薬材を売り、酒や「土布」を持ち帰った。さらに光緒年間（1875～1908）になると、州城では薪や草の需要が急増した。その理由はつぎの2つである。ひとつは、チャン族地区に新たに伝来されたトウモロコシの生産が伸びて、それを原料に焼酎を作って店をだす者が増加し、その焼酎作りのために大量の薪が必要とされたことである。また酒カスをブタにあたえると容易に肥えることがわかって、養豚も盛んになった。いまひとつは、茂州が北の松潘と南の灌県を結ぶ漢藏交易路の中間点に位置していて、馬や馬夫の宿泊施設である「馬店」が多く、馬の飼料として大量の草が必要とされたことである。そこで州城周辺の農民は、山から薪を切り出し、草を刈って売り、現金収入を得るようになった。男性ばかりでなく、女性も糸繰りや織り仕事をやめてそれに従事した。現金収入が増えた彼らは、麻衣を城内で購入する一方、やや値のはる「土布」を買い始めた。「土布」は麻布にくらべて柔らかく、みばえがした。彼らは、まだ貴重品であった「土布」をハレ着に仕立て、麻衣を仕事着兼ふだん着として着用した［四川省編輯組 1986：41-42］。

また解放前に茂県の商会会長であった王栄軒によれば、当時、「土布」の大部分は崇慶州産であった。崇慶州は、茂州から岷江に沿って南へ約210キロ下った、成都の西の盆地内にある。民国初年、城内には、崇慶州出身者を含めた外地の漢族が経営するやや大きな3軒の布店があった。布は、主に崇慶の運搬業者によって茂州まで運ばれ、布店では来店するチャン族らにそれを現金で売った。城内では、市が毎日開かれ、日々、数百人の少数民族が薬草を背負って売りにきていた。また行商人たちは掛け買いで布を卸し、塩や雑貨とともに村むらを売り歩いた。一部は、ケシ栽培を盛んに行って経済的なゆとりをもち始めた西北の蘆花や黒水にも転売された。また漢藏交易の2ルートである茂州―松潘路と雑谷脳―大小金路への交差地点に位置した威州（汶川県）では、茂州についで油や塩、酒、土布、雑貨などの取引が盛んであった。「土布」は崇慶や成都の東の遂寧、安岳、中江などから運ばれ、威州や近くの克枯にかなり普及した。しかし雁門や通化、薛城などのように州城から離れた地域では、依然として麻布の服が多かったという［四川省編輯組 1986：35］。

一方、ヤギについても、麻と同様に、副業による現金収入が増えて肥料や衣服を購入す

るようになり、ヤギそのものの利用価値が減ってきた。そして人民公社が解体された1980年代の前半には、個人に分配されたヤギの多くが飼育のための人手が足りないことや森林法の制定で飼いにくくなったことなどの理由で売り払われてしまった。しかしヤギ皮のベストは寒い日に山中で行動するには最も適した仕事着であるため、北部や西部の地域ではほとんどどの家にも備えられている。

（2）　**食生活**（イラスト 13～15）

チャン族の食生活には、この100年あまりの間にいくつかの大きな変化がみられる。第1は食糧の自給が達成されたこと、第2は主食がチンクー麦からトウモロコシに変わり、さらに米食が普及してきたことである。

かつてチャン族地区は、寒冷で耕地の少ない山間部という自然条件のために毎年平均して数ヵ月分の食糧が不足した。しかし人民共和国になってさまざまな政策が実施された結果、現在では大部分の地域で自給が達成されている。また19世紀末に伝来されたトウモロコシは、従来のソバやチンクー麦よりも1畝あたりの生産高が高かったために替わって主食となった。さらに1980年代に生産請負制が導入されてからは各戸の現金収入が増加し、米の購入が増した。以下では、茂県雅都郷の食生活の事例を中心にその具体的な変化をのべていく。当地は、長い間交通が不便であったために外部との接触が少なく、現在でも伝統的な生活習慣が色濃く残された地域である。

日常の食　1日3食、遅めの朝食と簡単な昼食、夕食が一般的である。朝食は［mumu］（「饃饃」）と「酸菜」、昼食も［mumu］や焼いたジャガイモに「酸菜」で、農繁期は畑に［mumu］を携帯する。［mumu］は、「焼餅」の一種で、トウモロコシの粉を水で溶いて塩やサンショウで味つけし、鉄鍋で直径約20センチ、厚さ5～10ミリの丸型に焼く。保存食として多めに焼いておき、必要に応じてこれをイロリの灰のなかに入れ、あぶって食べる。「酸菜」は、酸味のある漬け物で、「圜根」（カブの一種）や白菜、青菜、ダイコンなどの野菜をざっくりと切り、鍋で煮てから甕に入れ、蓋をする。このとき塩はいれない。2、3日目から食べる。

夕食は、かつては［mumu］やトウモロコシ粉をとろ火で煮込んで粥状にした「玉米蒸蒸」や、米にトウモロコシ粉を加えて煮込んだ「金裏銀」などが主であり、ハレの日の特別な食物として米を食べた。しかし1980年代後半頃から米食が普及し、現在ではトウモロコシやジャガイモは家畜の飼料にされたり、米と交換されることが多い。1994年の米との交換率は、米1に対してトウモロコシ2、ジャガイモ5である。

副菜は、「酸菜」や、時には豚肉を燻製にした［pis］を豆や野菜と煮込んだものをつける。［pis］は、彼らの伝統的な食物であり、主要なタンパク源でもある。各家庭では、毎年、春節の1月ほど前にブタを数頭殺し、肉を半身か何等分かの塊に切り分けて塩をすりこみ、屋上の軒下や貯蔵処につるして風にあてる。さらに居間の天井に吊りさげてイロリ

の煙で燻す。脂身は直径30〜40センチ、厚さ 4〜5センチの盆型にして保存し、食用油として使う。臓物も燻製にする。[pis] は 1 年分の肉として貯蔵され、これを煮込む、炒めるのがチャン族の代表的なごちそうである。よって [pis] が天井からたくさん吊された家庭ほど裕福だとみなされる。またこれは社交上の贈答品としても重要である。特に冠婚葬祭の時には、主人側が何頭の豚や牛を殺し、どれだけの [pis] を消費してもてなしたか、参列者がどれほどの [pis] を贈ったかが儀式の盛大さや主人側の社会的地位を示す。

[pis] 以外のタンパク源としては、牛やヤギ、ノロなどの野生動物がある。しかし牛は耕作用であり、ヤギも肥料や衣料などの原料として飼育されているために祭祀時に犠牲にされて食することはあるが、日常的に殺して肉を食べたり、乳や油を利用する習慣はない。また野生動物は近年、狩猟量が激減している。なお彼らには川魚を食べる習慣はない。当地では幼児の屍体を水葬にする習慣があり、魚はその転生したものとみなされるからである。

「ハレ」の日の食　「ハレ」の日には酒が必ず用意される。なかでも甕入りのチンクー酒は、彼らの伝統的な自家製の発酵酒で、正式な儀礼には不可欠である。例えば紛争の和解や村の掟に違反して住民に謝罪するような場合には、必ず甕入りの酒を準備する。和解や謝罪は、酒を同じ甕から飲むことによって初めて承認される。

甕入りの酒は、秋の収穫後に各家庭で作る。収穫したばかりのチンクー麦あるいはトウモロコシを鍋に入れ、水を加えて煮、それを土甕にいれて麹を加え、甕の口を草でふさいで醗酵させる。家長は、年初に神棚の前に置かれた甕の口をあけ、飲む前に諸々の神々へ捧げる儀式を行う。甕の中に長さ 1 メートル位の竹の管をさしこんで引き抜き、管の先についた酒を指であたりに撒きながら神への感謝の言葉を唱えるのである。その後、年齢に従って男性から女性、子供の順に飲む。飲み方は、お湯わりである。イロリの鍋で沸騰させた湯を杓子で酒の甕の口にそそぎ、増えた湯の分量だけを甕にさした竹の管で飲む。なお近年は、チンクー麦の栽培が減ったために「白酒」を購入して代用することも多い。

酒とならんで儀式において重要なものは、ヤギの犠牲である[17]。特に集落全体で行う「祭山会」や葬式では、ヤギは人の身代わりとして神へ捧げられ、儀式終了後に肉や臓物が全員に分配されるか、煮込んで肉汁にして皆で食べる。頭部や皮は神に供えてから「シピ」に贈られる。ただし犠牲にされる家畜が必ずヤギであるとはかぎらない。儀式の規模が盛大であれば牛を犠牲にし、地域によっては馬や鶏、犬であったりする[18]。

例えば赤不蘇区では、葬式では牛を犠牲にする。1988 年 2 月に茂県赤不蘇区雅都郷赤不寨村で行われた Y·Z（54 歳・女性）の葬式では、肉の分配や飲食についてはつぎのようであった。葬式の参列者は約 800 人で、地域の平均からみれば小規模であった。最終日の宴席のために約 1000 元が費やされ、酒、ヤク 1 頭、タバコ、野菜、菓子類などが購入された。宴席には 7 種類の副菜が用意され、牛肉と [pis] がふんだんに消費された。献立は牛肉と

ジャガイモの煮込み、牛肉と人参、青菜、葱、ニンニクの苗の煮込み、[pis] と白菜の炒めもの、ブタの臓物の煮込み、豆の煮物、炒めた春雨、豆腐と葱の煮込みなどである。参列者は10人前後が地面に車座になり、洗面器などに盛られたおかずを木の枝で代用した箸でつついた。死者の母方の親類には特に卓が設けられ、シャブシャブが出された。母方の親類は最も大切な客として遇されるが、彼らの側も甕入りのチンクー酒、数十斤の [pis] や太陽や月をかたどった大型の [mumu]、数百元の現金などを持って弔問しなければならない。

また参列者は、主家との親類関係やつきあいの程度によって [pis] や [mumu]、酒、乾麺、数元から10数元の現金を持っていく。誰が何を出したかは受付の若者が記す。集まった [pis] と [mumu] は、宴席の最後に誰からどれだけの物が贈られたかを全員の前でよみあげ、故人の親類に順に分け与えられる。一般の参列者には、宴の最後に主家からタバコや菓子類が配られる。また集落内の各戸は、[mumu] 1 個と火葬のための薪を一カゴ供出する。さらに原則として男性は葬儀における様々な役割を分担し、宴席用の食物の調理も行う。一方、女性は遠来の客を手分けして自宅に宿泊させ、食事の世話をする。よって村人の手伝いに対して感謝を表すために葬儀の数日後に、主家はチンクー酒の甕を用意し、住民全員を招いて礼を述べなければならない。彼らの社会では集落内の冠婚葬祭は相互扶助が原則であり、主家はすべてが終了した後にチンクー酒をふるまうことで感謝を表す。

以上のように葬式や祭山会では犠牲を捧げて災いを払うことを主目的の一つとするのに対して、結婚式や春節などの喜び事では家畜の犠牲は行わず、酒と肉を多量に使用した宴席が主であり、その規模は収入の増加とともに年々派手になっている。

茂県赤不蘇区では、春節は、最も近い10世帯前後からなる一族どうしが交互に夕食に招きあう。1989年の春節では雅都郷中心村の陳家の宴はつぎのようであった。陳一族は、父と4人の息子の世帯を中心にした7世帯、約40人からなり、大晦日から7日までの7日間、戸主の年齢の順に各世帯が宴を主催した。当番になった家では、一族の若者の手をかりて朝から食事の準備を始める。大晦日の宴は、父と同居する三男の家で夜7時から元旦の朝まで続いた。料理は、[pis] の薄切りにトウガラシと砂糖のタレをからめたもの、[pis] とカブの煮物、豚脂身の煮込み、牛肉とニンジン、カブの煮込み、豚肝とネギの炒めもの（味付けはトウガラシ、サンショウ、醤油）、炒めた春雨、落花生、ピータン、揚げエビセンベイ、千切りジャガイモの炒めもの、麺に [pis] と豆腐、ネギを煮込んだもの（「混合飯」）などで、約20斤の [pis] と10数斤の牛肉を使った。豆腐は、長男の妻が作る。豆腐作りの技術は、人民解放軍兵士であった夫の赴任地の紅原県で漢族から学んだ。このあたりでは彼女しかできないため、時おり頼まれて作り副収入としている。酒は「白酒」と葡萄酒、蜂蜜酒がだされた。また新年を迎える12時前に新しいチンクー酒の甕が開けられた。

以上のように、ハレの日には必ずチンクー酒と [pis] を用意し、その量は多ければ多い

ほどよいと評価される。そのため冠婚葬祭時には、親族は必ず［pis］と［mumu］を主催者へ贈る。

（3）　住（イラスト 16～22）

集落の概観　チャン族の集落は、一般に、海抜高度 2000 メートル前後の山腹にある。その外観は、石造りの家屋が山腹斜面に重なりあって聳え立ち、山砦のようである。

茂県雅都郷赤不寨村大瓜子寨は、山砦型の典型的な集落の一つである。雅都郷は、成都から北西へおよそ 260 キロ、茂県の県城からは赤不蘇河に沿って西北へ 60 数キロの峡谷の奥に位置する。郷は、長期にわたって外部とはほとんど隔絶された状態にあったが、1967 年に至ってようやく県城から当地まで車の通行可能な道路が通じた。現在は、茂県県城から当郷の中心村を経て黒水県の県城まで毎日定期バス 1 便が往復している。また 1980 年代以降は、改革開放政策のもとで当地における人や物資の移動も増加している。トラックやトラクターを私有して運送業を兼業する者や、特産物となったサンショウを商品として省内や他省の都市をまわる若者も現れている。

大瓜子寨は、中心村からさらに峡谷を西へ 4～5 キロ奥に入った所に位置する。1991 年の統計では、戸数 26 戸、人口約 120 人で、全員がチャン族である。陳姓、余姓、楊姓、王姓の 4 つ父系親族集団があり、それぞれの戸数は 13 戸、4 戸、7 戸、2 戸である。伝説では、昔、陳家の 3 兄弟が人口過剰となった故地（現在の中心村）を出てここに移り住み、400 年前に余家が、300 年前には楊家が周辺の高山地区（現在の黒水県）から移ってきた。古老の話によれば、1937 年頃は戸数が 12 戸にすぎなかった。1940 年代になって漢族がアヘンの原料となるケシを持ち込み、住民がそれを栽培するようになると、アヘンの売人が木綿布や「白酒」、銃、銀などを持ってたびたびやって来るようになった。当初、住民はケシ栽培によって経済的に潤ったが、アヘンの喫煙が住民に広まるようになるにつれて以前よりも困窮する者が少なくなかったという。

寨の全景は、住居部分と畑、背後の山から構成されている。住居部分は、麓の道から幅 2 メートルほどの急傾斜の坂道を 300 メートルくらいあがった丘の上にある。家屋は、数軒ずつがひとかたまりになって傾斜地に階段状に建ち並び、隣接した家屋は屋上をつたって往来できる。また幅 1 メートルほどの小道が、高さ 7～8 メートルの家屋の側壁の間を迷路のように縦横に走り、上下に並ぶ家屋間の小道は、上方が木材と石で固めた屋根で覆われて地下道のような構造になっている。

住居部分から寨の後方の山道を数十メートルほど上ると、湧水がある。そこは、集落の水源であり、女性達が毎日水汲みに通う。湧水からさらに 20 分ほど上ると、小さな広場が開けている。そこには山の神を迎える「ナヘシ」が設けられており、毎年 5 月 5 日に「ナヘシホロ」（山の神祭り）が行われる。「ナヘシホロ」は、かつては最も盛んに行われていた祭りであったが、1950 年代後半から 40 年あまり中断し、数年前に復活されたばかりで

ある。祭りでは、各戸が穀物を供出して経費を均等に負担し、当番の者が酒と犠牲の牛を準備する。当日は、早朝に老若男女が酒と［mumu］を持って「ナヘシ」の前に集まり、長老によってコノテガシワが燃やされ、「山神菩薩」と神樹に供物を捧げて祈りをあげる。また牛を殺して解体し、牛角を「ナヘシ」の上方の［bǒlupi］に掛ける。肉は煮て肉汁を作り、儀式が終わってから全員で酒を飲みながら共に食い、「鍋庄舞」を踊る。その年の災害状況によって虫害や雹害、旱害を防ぎ、あるいは除くための儀式を同時に行うことがある。その場合はヤギを犠牲にして解体し、角を「ナヘシ」に掛ける。

「ナヘシ」のある山およびその周辺の山々は、昔からの慣習でこの集落の領有域とみなされている。山の資源である木材の切り出しや薬草の採取などは、原則として集落の住民に一定の期間を限って許されており、ウシやヤギを放牧する草地は、優先的に使用する。赤不寨村では、昔から河を境に北側の山地は大瓜子寨のものであるが、南側はむかいの四寨のものであり、現在もそれは周知の了解事項である。大瓜子寨で代々「グセ」（寨のまとめ役）を勤めてきた陳某（67歳・男性）によれば、かつてはどの家でも多量の薪を必要としたために、密かによその山に入ったり、封山の時期である5、6月に山に入って薪を伐ることがしばしばあった。発覚した場合は、初犯であれば鎌や「弯刀」を没収されたうえで、「リメシ」（チンクー酒）や6～10斤のチンクー麦をおさめて許してもらった。しかし常習犯は捕えられ、身内か所属する集落が銀20～30両とアヘン20～30両を支払わなければ釈放されなかった。そのため個人の違反はしばしば集落どうしの争いに発展した。彼が12歳頃には、よそ者が山の木を勝手に伐ったことが原因で四寨と1ヵ月ほど争って数人の死者がでた。また北に隣接する黒水県側の集落とは何度も争ったという。

畑は、赤不蘇河に沿った谷間の平らな土地に開かれている。主な栽培作物はトウモロコシで、年に1回収穫する。食糧の自給はほぼみたされているというが、1人あたりの畑は1畝前後であり、人口に対する耕地面積は不足している。そこで近年は、政府の奨励金をうけて荒れ地を開墾し、利益の大きいサンショウやリンゴの栽培をする者が増えている。

畑のはずれには陳家の火葬場がある。余家と楊家には一族固有の火葬場がない。そこで余家と楊家は、死者がでた場合には酒と［pis］を持って陳家の族長に火葬場の使用を頼みに行く。

ジル　彼らの伝統的な家屋は、チャン語では「ジル」、漢語では「碉房」（石室）とよばれる。外形は、四周を厚さ30～50センチ、高さ3～4メートルあまりの石積みの壁で囲んだ3層の箱型で、屋根は木材を組んだ上に草をしきつめ、泥土で葺いて平らな屋上になっている。

入り口は1階にある。入り口周辺には、家屋の側壁にそって薪が積み上げられている。薪は、1戸あたりひと冬に最低1000斤は必要とされ、薪集めは農閑期の重要な仕事である。庭は、家屋が密集しているためにほとんどないが、家屋の脇の空地に「圓根」（カブの一種）

やタバコが栽培されていることがある。家屋から少し離れた所には、トイレ用の小屋がある。穴を深く掘ってその上に丸太を2本かけた形のもので、人民共和国になってから徐々に普及してきた。

家屋の内部は、1階が畜舎、2階が人の居住部分、3階が屋上になっている。1階の畜舎は、窓がないために真っ暗で、家畜や糞尿の臭気が充満している。床面には藁や草がしかれ、片側を低い石積みの壁でしきって馬やヤギ、ブタ、ニワトリなどを入れる。壁際には飼料桶や水桶、犂や鍬などが置いてある。階上へは、1本の木を階段状にほりこんだ「独木梯」を上る。幅約50センチで、上階のあがり口に50度位の傾斜でたてかけてある。近年は2枚の板で足踏み部分をはさむ漢族式の「板梯」も増えている。しかし「独木梯」は可動式なので、屋上や戸外でよく使われている。

2階は人の居住部分である。20畳をこえるくらいのワンルーム形式の主室と、奥に板壁で仕切られた寝室がある。内部は、小さな窓と天井の煙を出す穴から明りがもれる程度で、薄暗い。天井にはブタの乾燥肉や直径80センチくらいの円型のラードが幾つか吊り下げられている。部屋の中央にはイロリがきられ、奥のかどには「天地国君親師」や財神、竈神などと書いた紅い紙を貼った神棚が設けられている。

イロリは、一辺が2メートル弱、高さ30センチほどの方形で、板枠で囲んで作る。中央には、直径80～100センチ、重さ15～50キロの3本脚の鉄製の五徳「シミ」を置く。「シミ」は裕福な家ほど大きい。イロリの火は「万年火」と称され、年越しの時には一晩じゅう燃やす。ふだんは就寝時に灰をかぶせて埋火にし、翌朝の火種だけを残しておく。家庭生活はイロリを中心に営まれる。家族はこれを囲んで休息し、炊事や食事をし、接客する。またイロリの席には定めがあり、神棚に一番近い上座には老人や来客が座り、むかって右側には男性、左側には女性が年齢順に並ぶ。室内には台所はない。壁の一角に、縦60～70センチ、横約1メートル、高さ80～90センチの石板製の水槽がはめこまれ、ここに外から汲んできた水をためて、飲料や調理に使う。水桶の辺りには木製の水桶や瓢、直径約70センチの両手型の鉄鍋が置かれている。

「シミ」は、チャン族社会では［pis］とならぶ貴重な財産である。結婚して分家する時には、所帯道具に「シミ」と鉄鍋、酒の甕を用意する。また「シミ」には火神「ムプシ」がいると信じられており、3本脚のうちの神だなにむかって右側の脚についた小さな鉄輪が火の神である。そのほかの2本はそれぞれ男性と女性の祖先神を表す。食事の前には、最初の飯を鉄輪の小さな穴に供える。

「シミ」やイロリは神聖なものであり、様々な禁忌がある。「シミ」は動かせない。動かさなければならない時には、その家の主人が月の3、13、23日のどれかの日に神に一家の無災無難を祈った後に行う。家族外の者は、火箸で「シミ」の脚を打ったり、3本の脚を足で踏んだりしてはならない。「シミ」の上で履物や靴下を乾かしたり、「シミ」の上方に

何かをかけわたしてはならない。これを犯したら、腹痛になり、でき物ができる。「シミ」を手でさすったり、火神の鉄輪にふれてはならない。それは菩薩に触れることであり、そうしたら、必ず家畜を失う。イロリの外側を囲んだ枠に坐ったり、足をかけたり、中に唾を吐いてはいけない。炉の火の上に水をかけてはいけない。家族がそれをしたら粉を灰の上にまき、外部の者がそうしたら激しくののしられる。

3階の屋上には、穀物貯蔵処がある。屋根をかけ、3方を板で囲んで風通しをよくしてある。また山側の一辺の中央には、細かい石を円錐状に1メートルほどに積み上げた「ナヘシ」がある。「ナヘシ」は神を家に招く所であり、家屋が完成した時に母方オジがそこに「ウルピ」と山羊角を置く。毎月1日と15日、春節にコノテガシワを燃やして煙りをあげ、祀る。また屋上の一隅に子供の寝室を作ることもある。

家屋の建築　チャン族の男子には、石を積み上げる技術が代々伝えられている。男子は17、18歳になると父親や親族の男性からその技術を学び、家屋建築の手伝いに参加する。またすでに漢代の頃から、石積みの技術をいかして農閑期に成都盆地へ河川の堤防工事や井戸掘りの出稼ぎに出たことが知られている。

家屋の建築は、農閑期に親類や隣人の助けをえて行う。住民も原則として全戸が必ず手伝いに行かなければならない。手伝いに出た者は、集落周辺の山間や河辺に散在している石を、成人男性は1回に最低数個以上の大石を背負い、女性は背負いカゴ1杯の小石を運ぶ。また女性は屋上に敷く「紫子花」をそれぞれ背負いカゴ1杯集めておくる。

建築時に使用する用具は「泥撑子」「手鎚」「木槌」の3つである。建築の方法は、まず地中に幅約60センチ、深さ約1メートルの溝を掘り、その中に石を砕いて入れ、隙間に黄泥を塗り込みながら石と黄泥を一層ずつ積んでいく。内側は垂直に、外側は次第に狭くなるように地上3メートル越えるくらいまで積む。上方の石壁は厚さ45〜50センチになる。上方に小さな穴をあけ、直径15センチほどの木材を横にわたして梁とし、その上に木板を張る。2階も同様に造る。屋上は、横梁の上に木板あるいは石板をはり、その上に「紫子花」の小枝をしきつめ、水を加えて湿らせた黄土で隙間をつめる。さらに鶏尿をまぜた乾いた土を一層しき、木槌でたたき平らにする。屋上全体は、奥の壁は外にむかって、両側の壁は中央にむかってやや傾け、一番低くなったところに木を割ってくりぬいたものを置き、排水溝にする。

ロン（石碉）　「ロン」は、高さが20〜50メートルにも及ぶ巨大な石の塔である。基部は、一辺が数メートルの4角形や5角形、6角形、8角形などさまざまな型がある。内部は、梁と木板を組み合わせた10数層からなり、上にむかってゆるやかに細くなっている。側面の石壁は、厚さが1〜2メートルで、各層には長さ約30センチ、幅数センチの穴が穿たれている。また側壁には、数十センチ四方の窓が造られているものものもある。戦いの時には、この窓から石を落として敵を撃退する。入り口は地上数メートルの所にあり、出入りは容

易ではない。

「ロン」の目的は、集団の自衛である。そのために、街道沿いや守りの要所などに築かれて敵の接近を知らせる見張り用のものと、村の中心部にあって、戦時には住民や家畜を収容し、食糧や水、薪、草、銃や石などの武器を貯えてたてこもるためのものがある。

また茂県黒虎郷のように「ロン」が林立していた所もある。黒虎郷は、1990年の統計では戸数387戸、人口2189人で、ほぼ全員がチャン族である。かつて楊将軍を指導者として漢族の侵入に激しく抵抗した集団として知られている。また「土匪」の襲来がたびたびあり、特に民国24年（1935）頃にはケシ栽培が盛んに行われていたために、収穫期になると「土匪」が頻繁に襲ってきて、死者もでた。当時は総戸数約90戸の郷内に13基の「ロン」があった。一族ごとに少なくとも1基、裕福な者は1戸に1基の「ロン」を修築した。「ロン」は家屋に隣接して造られ、5、6層の低いものが多い。修築時には各戸から手伝いをだし、1層を約1ヵ月かけて造り、毎年一層ずつ造った。完成時には、屋上に「ナシ」を設けて神を祀った。なお現在も郷内の小河壩村（1990年の統計では戸数86戸、人口497人）には、7基の「ロン」が残っている。

ところでこのような巨大な石塔は、岷江流域のチャン族だけではなく、西の大渡河流域や雅礱江流域およびその支流一帯にも広く分布している。この一帯は古代「羌」の末裔と目される集団が居住する地域であり、「ロン」はこの「羌」系文化に関わるものと推定される。また文献史料によれば、すでに2000年前にこの石塔は存在している。『後漢書』南蛮西南夷列伝によれば、漢代、岷江上流域の「騊駼」には、高さ十余丈（30～40メートル）の石塔「邛龍」があった。また『三国志』張嶷伝によれば、三国時代（A.D.220～280）、「羌族」は険要の地に「石門」を構え、その上に床を敷いて石を積み上げ、通過しようとする敵に対して頭上から石を投下した。さらに『隋書』附国伝によれば、隋・唐代（6～10世紀）、大渡河以西の「附国」には、同様の石塔『礫』（チャオ）があり、「寺院の塔に似て……夜には閉めて外敵の襲来に備えた」。そして明・清代には、「土司」の権威と財力を象徴するものとしてこれが造られた。残存する碉楼の多くは、この頃のものである。

このうち特にギャロン・チベット族地区では、これが「ジャ」と称されて多様のものが造られ、現在もなお各地に残されている。「ジャ」の存在を広く世に知らしめたのは、18世紀半ばの金川事変である。金川事変は、金川のギャロン人が清王朝の支配を拒んで反旗を翻した戦いであり、乾隆11年（1746）と33年（1768）に2回の大規模な戦闘を行い、41年（1776）にようやく平定された。清軍の苦戦の大きな原因は、この「ジャ」であった。金川地区は、峡谷をなす海抜高度2000メートル前後の峡谷地帯にあって山頂が河岸までせまり、一本の狭い道が傾斜面をくねりながら続いている。ギャロン人は道路の上方に新たな「ジャ」を築き、その側面に穿った数ヵ所の窓から銃を放ち、石を投げ落として、敵の侵入を防いだ。清軍は「ジャ」にたてこもったわずか数十人のために一歩も進むことがで

きず、四川総督可爾泰の率いる清軍はついに総督以下全軍が壊滅した。清朝は北京に連行した捕虜に「ジャ」を造らせて兵を訓練し、雨の夜、「ジャ」に密かに近づいて高梯子をかけ、人もろとも焼き殺すという戦法を採用した。さらにギャロン内部からの通報者も得て、1年後、ようやく金川を攻め落とした。この戦いによって、敗者のギャロン側は、大金の7万の人口が2万数千まで激減し、さらにそのうちの2万が逃亡あるいは強制移住によって故郷を離れた。また勝者の清朝側も兵10万のうちから6万の死傷者をだし、膨大な戦費を失ったという。

5．年中行事（イラスト 23、24）

チャン族の年中行事は、中華人民共和国成立後の1950年代および文化大革命を境に大きく変化した。共和国政府がすすめた迷信活動打破政策は、結果的に、1940年代まで伝えられてきたチャン族の伝統的な行事や宗教的活動の多くを中断させた。それらは1980年代になってようやく復活し始めたものの、多くの行事や宗教的活動が消滅し、あるいは内容が簡略化したり、規模が縮小化した。また約30年間の伝承の断絶は一世代の消滅を意味するものであり、伝える者の多くが途絶えた。さらに1980年代からの中国社会の激変は伝えられる側の意識を変えつつある。では、この100年の間に彼らの暮らしのリズムや意識はどのように変化してきたのだろうか。1940年代から1990年代中期までの各地の年中行事および宗教的活動における変化を通して考察する。

（1）　1940年代の年中行事および宗教的活動

1940年代のチャン族の各種行事には、民族伝統の行事だけではなく、明らかに外来の行事とわかるものが併存している。ただし外来要素の導入の内容や深さについては、地域によってかなり異なっている（表4）。

民族の伝統行事を代表するのは、山神を祀る「祭山会」である。これは集落あるいは地域の共同祭祀としてかつて最も盛んに行われた。山神は山間の天候や山野の害獣、害虫を管理すると信じられ、[bʻlupi]（白石）によって象徴されている。[bʻlupi] は山頂や神樹林、家屋の屋上に造られた石塔「ナヘシ」に置かれ、神は各処の「ナヘシ」を通って、天から山頂、家屋に降臨し、また逆をたどって天に戻るとされた。「祭山会」では、「シピ」（宗教職能者）を中心に神を迎え、送ることで住民の安全や五穀豊穣、収穫感謝を祈る。また後述するように、開催時期は地域によって違いがみられるものの、一般に春初あるいは初夏、および秋の終わりに行われ、春と秋には同様の儀式が繰り返された。このうち特に10月1日の収穫後の「祭山会」は、「羌暦年」[19] として彼らの1年の始まりを意味するものであった。

一方、外来の行事については、黒水県でチベット族およびチベット仏教の影響がみられ

る以外は、全地域的に漢族の影響が顕著である。

導入された外来の行事は、その性格からみて大きく3つに分けられる。第1は、自然の規則的な変化に基づくものである。2月2日の「龍擡頭」、5月5日の端午節、6月6日の「晒龍袍」、8月15日の中秋節、9月9日の重陽節などがこれにあたる。これらの時期は気候の変化が大きく自然の災いがおこりやすい。そこで人々は身を清め、災いを払うために様々な呪的行為を行う。茂県では、端午節の朝、朝露を踏んで野に菖蒲やヨモギを採りに行く。当日の朝露や菖蒲、ヨモギは邪気を払うと信じられているからである。またこの日、母親はサンショウを娘の耳たぶにぬって麻痺させ、始めてピアス用の穴をあける。茂県赤不蘇区大瓜子では、端午節には門口に菖蒲を挿し、集落の裏山の湧き水を飲んで病いなどの災いはらう。また茂県沙壩区三龍では、2月2日には炒ったトウモロコシ粉を室内の四隅に撒いて邪を払う、6月6日には絹や毛の織物を干して害虫をおう、9月9日にはその年に収穫したチンクー麦やトウモロコシで酒を造る、などを行う。

このほか自然にそった節句は農作業のめやすとしても重要であり、2月2日はチャン族の伝統行事においても春耕の開始として位置づけられている。よって自然条件を基にした節句は、従来の習俗に加えてそのまま受容されることが多かったと思われる。

第2は、4月の清明節や7月15日の中元節に代表される祖先祭祀である。チャン族は火葬を伝統としており、骨灰は火葬場にそのまま放置するため、漢族のいわゆる墓はない。よって清代中期以降の土葬の普及とともに、墓参りをして紙銭を焼くという習慣が導入されていったものと思われる。北川県青片郷尚西では、清明節には墓参りをし、7月15日には神棚に酒菜を供え、夜、その前で祖先の名前を書いた紙を焼きながらその名前を呼んで祖先を迎える。また茂県赤不蘇区では、大晦日に、祖先の数の円を門前に描いてそれぞれの円内で紙銭を焼いて祖霊を迎え、正月30日に門口でコノテガシワを焚いてこれを送る。

第3は、特定の神々に対する祭祀である。チャン族は自然界の諸霊の存在を信じ、特に山神を信奉してそれを白石［bɯpi］で象徴した。しかし漢族との接触が増え、その政治的支配を受けるようになると、廟が建てられ、［bɯpi］で表象されていた神々は神像に具象化されて廟にまつられた。また神々は、玉皇大帝を筆頭に家庭の神棚にも祀られた。廟会としては2、6、9月の19日の「観音会」、3月19日の「太陽会」、28日の「東岳会」、4月8日の「仏爺会」、28日の「薬王会」、5月13日の「関帝会」、6月の「川主会」、10月の「地母会」などがある。このうち観音会は女性に広く信じられた。

以上の外来行事の中で全地域的に普及度が高いのは、春節、端午節、牛王会である。特に春節がすでに広く普及していたことは、1年の始まりを秋の「羌暦年」とした伝統のサイクルとは別に、漢暦の年初の観念がかなり受容されていたことを示すであろう（表4）。また茂県渭門郷や北川県青片郷のように1940年代にすでに春節中に伝統の「祭山会」が行われている地域もある。これらの地域における異文化間の行事の融合は、外枠は外来仕立

てであるが中身は伝統のものという形をとっており、チャン族が強力な中国王朝の「外力」および異文化をどのように受容したのかを示す事例といえよう。

また5月の端午節と10月の牛王会はチャン族の伝来の「祭山会」と日時がほぼ一致しており、同様の季節感と意味のもとでそのまま伝来の行事に重ねて受容されていったものと思われる。例えば5月については、清代道光11年（1831）の『茂州志』に、チャン族は端午の頃最も盛んな祭りをするとある。茂州（現在の茂県）では、現在も共同祈願として「祭山会」を実施する一方で、戸別単位に避邪のことを行う。

「牛王会」も同様である。集落全体で「羌暦年」の共同祈願を終えた後、「牛親家」（牛の共同所有者）の数戸を単位として役牛をねぎらう「牛王会」を行う。例えば理県蒲溪郷では、午前中に集落全体で祭山会をした後、夕方から「牛王会」を行う。この日、牛には一日中の休息があたえられ、神棚の牛王菩薩には豆腐などの供物が捧げられる。「牛親家」にとっては次年度の牛の使用順や飼育などを相談する大切な日でもある。また理県上三理では、つぎのように漢族の「牛王会」の内容をほぼそのまま導入し、集落の共同祈願として行った。

牛王廟に牝牛を繋ぎ、牛の前には中央に穴をあけた餅（「糍粑」）と［mumu］を並べる。

鶏の血をまいてあたりを清め、コノテガシワを燃やしてたてた煙りを牛にまわして、牛を長老の前まで引いていく。長老は呪文を唱えながら、穴に麻縄をとおした餅を牛の角にかける。牛を集落内に放つ。家々でも、耕牛に草と麺を与え、角には餅をかけて、終日、集落内に放って自由にさせる。理県三里ではチャン族の伝統の主食である［mumu］を外来の「糍粑」と並べて牛に供えており、「牛王会」の導入のあり様を物語っている。

これは、当時、四川省の漢族の農村で広く行われた「牛王誕」とほぼ同じである。嘉慶21年（1816）『華陽県志』44巻によれば、華陽県では10月1日には、糯米をついて作った餅「糍粑」を牛の角にかけるとあり、民国22年（1933）『灌県志』18巻には、「糍粑」を牛に食べさせるとある。理県三里ではチャン族伝統の主食である［mumu］を外来の「糍粑」と並べて牛に供えており、「牛王会」の導入のあり様を物語っている。

このほか宗教的活動の中では、玉皇大帝の名称が最も広く普及し、「観音会」は女性を中心に広く信仰された。また四川省内で盛行した「哥老会」と関係の深い関帝を祀る「単刀会」や、岷江に都江堰を築いた李冰父子を祀る「川主会」[20]も北川県や汶川県のように漢族との接触が比較的頻繁な地域を中心に行われている。これらで特徴的なことは、外来の神々が全く独立した形で信仰されているのではなく、従来の体系のなかに組み込まれ、チャン族のそれらと共生する形で普及していることである。例えば各行事で祀る神は、外来の行事においても初めは伝来の［ʞlupi］で象徴された。しかし青片郷では［ʞlupi］に漢族の最高神である玉皇大帝をあてて、それを「玉皇碉碉」と称した。また逆に「玉皇大帝」は春節や端午節、中元節、中秋節などだけではなく、伝来の「祭山会」でも祀られた。こ

れはチャン族地区全体でみられる傾向である。さらに玉皇の下位に連なる財神や牛王神などの神々も漢族の神々の体系をそのままチャン族のそれに重ねて神棚に並べられた。それは、外来の神々の威力を受入れ、伝来の神々の力に重ねることで神の加護する力を一層強くすることであった。

では、外来文化の導入には地域によってどのような差異がみられるのだろうか。漢族文化の受容が比較的深いとされる北川県青片郷の場合はつぎのようである。青片郷では、既述の伝来の行事以外は大部分の行事が『北川県志』[1996：722-723] に記された漢族のそれと一致している。当地区は漢族地域に隣接し、物資の輸送路の沿線にあたっていたために長期にわたってチャン族と漢族との接触が頻繁であった。また 19 世紀半ば頃からすすんだ清朝の「改土帰流」では多数のチャン族が戸籍上の「漢民」に編入され、比較的早期から清朝政府の直接統治下に組み入れられた。そのためチャン族地区のなかでも漢族の行事が最も普及した地域となった。

汶川県綿池郷の場合も、北川県青片郷の状況に似ている。当郷も漢族地区の灌県とチベット族地区の松潘県を結ぶ輸送路沿線の中間点にあって、汶川県県城で交通の要地である威州鎮から 20 キロ余しか離れていない。そのため住民自身の県城との往来も頻繁で、県城で主催された立春時の「迎春典礼」[21] も行われた。ただし民族の変更はなされていない。このように漢族的要素を深く受容しているのは、北川県青片郷や汶川県綿池郷などのように政治的に県城政府の直接統治がほぼ及ぶ範囲にある地域である。またそこは漢族が集中して居住しているために、漢暦による生活が営まれていた。よって政治的、経済的に県城圏に含まれた地域では、必然的に漢暦が浸透していったものと思われる。

これに対して北西部の茂県赤不蘇区や理県蒲渓郷などは、漢族的要素の受容が浅い。当地はチャン族地区の西端と北端に位置して、むしろ隣接するのはチベット族地区であった。また大部分は山頂付近や山の奥深い所など交通の便があまりよくない閉鎖的な場所に位置しており、日常的な往来も多くなかった。

また茂県の渭門郷や三龍郷などのように、両者の中間的な受容状況を示す地域もある。そこでは伝統的な行事が主体ではあるが、外来の春節や清明節、端午節、中元節、中秋節なども受容され、その中で伝来の要素と外来の要素が適宜取捨選択されている。なお廟会は「観音会」以外はあまり盛んではない。これらの地域では、地理的歴史的に漢族との接触がそれほど頻繁であったわけではないが、壮年男性が農閑期に定期的に漢族地区に出稼ぎに出ていたために、彼らを伝播者として外来文化の受容が進んだことが考えられる。

以上のように外来行事の受容は、地理的歴史的条件に加えてその当時の政治的条件が大きく関わっているようである。また導入された行事は、現地の生活や生業にあわせて取捨選択され、伝来のものと組み合わされて行われている。すなわちチャン族は、漢族とチベット族という巨大な民族集団にはざまで政治的に中国王朝側にたつことで生き残ってきた

民族集団である。よって彼らの漢文化受容は、外面上は極めて柔軟でありながら、内面では従来の体系を堅持し、その範囲内で受容するという形をとるものといえよう。

（2）　祭山会

チャン族は、春の耕作開始時と秋の収穫終了時に山神を祀る「祭山会」を行ってきた。すなわち春と秋に類似の行事を繰り返し、1年間のサイクルにおいては10月1日の「羌暦年」を年初とし、これを境に1年を2期に分けていたと考えられる。

山神まつりは、チャン語では「ナヘシホロ」（漢語では「塔子会」）、「モトシ」（「祭天会」）とよばれ、「祭山会」と総称される。チャン族は山に暮らし、山を崇める人々である。集落の周辺には必ず神の山があり、そこには固有の名称をもつ山神がいた。山神は山の天候を支配し、作物を食い荒らしたり家畜を襲う山野の鳥獣を管理しており、それを敬わなければ人は大きな害を被ると信じられた。そこで白石［ƀlupi］を神の象徴として、集落の神山の頂きや麓、神樹林、家屋の屋上に設けた石塔「ナヘシ」の上部に置いた。神は［ƀlupi］に依って天上から山頂、家屋の屋上に降臨し、再び同じ道を通って天に帰るとされた。

チャン族の「祭山会」にはつぎのような特徴がみられる（表5）。

①祭りは、一つの集落で、あるいは複数の集落を含む一定地域の共同祈願として行われる。会首は各戸の戸主が1年交替で担当し、経費は全戸が穀物などを供出して平等に負担する。儀式は「シピ」が進める。最後に参加者は犠牲のヤギを共食し、肉を分配される（表6）。

②「祭山会」で招かれる神は、「シピ」の経典によれば、集落の山神と寨神（集落を開いた人）、および南の成都周辺や灌県から当集落に至る途中の集落の山神と寨神である。神は一般に白石［ƀlupi］で具象化されているため「白石神」とも称される。

③儀礼では、「シピ」が山神や祖先の力を借りて経文や行為の呪力で2つの特徴的な行為を行う。1つは害獣の駆除を表象したもので、チンクー麦粉あるいはソバ粉で作った山野の獣「ムンヘー」などを粉々に砕く、さらにそれを地中の穴に埋める。いま1つは五穀豊穣を祈願して、チンクー麦やトウモロコシの種子を天に向かって撒く。例えば理県龍渓郷では、9月30日の夜に高処でソバ粉製の鳥獣を「シピ」が一つずつ名を呼びながら刀で粉々にし、さらにそれらを集めて穴に封じる。10月1日は「シピ」が郷内23の集落の山神と地盤業主神を招き、ヤギを犠牲にし、チンクー麦を捧げる（表7）。また茂県三龍郷では、端午節の頃、郷内の集落を「シピ」が順に回る。早朝、12歳以上の男性が「シピ」とともに山頂の「ナヘシ」の前でヤギを犠牲にし、神に鳥獣の管理を願う。さらに「シピ」は羊皮鼓を打ちながら恍惚状態に入り、大きく跳躍すると同時にチンクー麦の種を空中から招く（表8）。

④開催時期は地域によって異なるが、年に2回、春と秋に類似した内容を繰り返す理県や汶川県と、5月あるいは6月を盛大に行う茂県に大別される。前者では、春はその年の

豊作を予め祈る願掛で、秋は収穫の願解である。彼らは春の農作業を開始する2月、あるいは種撒きの頃の3〜4月に豊作祈願の儀式を行い、1年間の農作業が終了する8月あるいは10月に収穫を祝う。それは収穫祭であり、また新年を意味しており、「羌暦年」とも称される。すなわちチャン族の1年の生活暦は、農作業を行う春と行わない冬の2季に大別されていたといえる。そしてこれらの時期を境に、人や物も大きな移動をくりかえした。男性は10月1日に年の始めを迎えてから外地に出稼ぎにでかけ、春耕開始までに米や新しい品物を持って帰ってきた。耕牛をあつかうのは男性とされていたからである。また耕牛も春耕の始まる2月に山頂の放牧場から集落内に連れてこられ、10月に再び放牧場に戻された。

これに対して後者は茂県以北にみられる特徴であり、むしろ遊牧民としての傾向を残す黒水の「座山会」[22]に近い。北方から南下して岷江流域に定着する以前のチャンの習俗を思わせる。

⑤春の祭山会では予祝や年占が行われる。内容的に農業の開始と不可分の行事であるので、元来は2月の春耕開始の時に行われたものではないかと考えられる。理県蒲渓郷の「ガル」では、種子を天に向かって撒いて豊作を願い、犠牲の牛の背に犂の模型を乗せて種子を撒くといった農耕の模擬儀礼を行う。さらに射撃、相撲、棒引きなどの年占や、人型を撃ちぬいて集落全体の災いを払う。

⑥春節における「祭山会」でも様々な年占が各地で行われた。茂県雅都郷では5日に山に登って「打巴」を行う。麦粉で作ったノロを山の斜面に置き、男性が離れた地点からそれを狙って銃で打ち、命中の具合でその年の豊作を占う。またかつては「成木責め」も行われた。胡桃の木を刀で傷つけて「成るか成らぬか」と脅かし、「成る」と答えさせ、豊穣を約束させる。茂県渭門郷では正月8日に白虎山で祭山会が行われた。「シピ」が経文によって［ƀlupi］に神を招き、さらに各戸が用意した五色の旗も神の依り代となって、1年間それぞれの畑に挿され、神と豊作を約したことを示した。また夜には集落の碉楼の前で「シピ」が牛の角によって1年間の吉兆を占った。このように春節期間中には予祝的な事柄が各地で行われており、チャン族地区における春節の普及が比較的早期であったことを思わせる。

⑦3月の「祭山会」での予祝は、トウモロコシの種撒き前に行われる。これはトウモロコシが清末に伝来してから行われるようになったものと考えられる。理県通化郷ではこれを4月に行う。畑の中央に3個の［ƀlupi］を置いて、「シピ」がそこに神を招いて谷神とする。さらに［ƀlupi］の中央に杉木を立て、上部には白旗を挿す。儀式終了後、白旗をそれぞれの畑に挿す。すなわち神は天から山頂、杉木を経て白旗に依り、豊作を約束するのである。同様のことは茂県渭門郷や雅都郷、北川県青片郷などでも行われた。

⑧5月の「祭山会」は、端午節の頃、茂県一帯で最も盛んに行われた。茂県黒虎郷では、

早朝、成人男性のみが神山にのぼり、「シピ」がソバやコムギ、トウモロコシなどの種子を撒く。参加者は争ってその種子拾う。多く拾うほど豊作が約束され、拾った種子は持ち帰って穀物入れに入れることで谷神を迎えたとされるからである。また15歳になった男子は［ʁlupi］を持って会に初めて参加し、集落の成員として認められた。

⑨秋の10月1日の「祭山会」は、チャン語では「ルマジ」あるいは「リメジ」とよばれる。「ルマ」はチャン人、「ルマジ」は新年を意味する（理県蒲渓郷）。漢語では「羌暦年」あるいは「羌年」とよばれる。1988年、阿壩藏族羌族自治州人民政府はこの日をチャン族の伝統の新年であるとし、州の祝日に定めた。しかし「羌暦年」は中断されて30年以上にも及び、すでに春節が新年として定着してしまったために、現状ではこの日を新年として祝う地域はあまりきかない。なお汶川や理県の河谷地区の一部では8月1日にこれが行われた。一説には、チャン族が山腹から河谷に移りすむようになって収穫の時期が早まったことにより収穫祝いも早まったというが、定かではない。

⑩「祭山会」には、春、夏、秋に定期的に行う場合と、雨乞いを目的とした不定期的な場合がある。雨乞いのための山神祭り[23]は、実は多くの行事が中断されたこの30年余りの間においても途絶えることなく行われており、旱魃がチャン族地区においていかに重大な被害をもたらしてきたかがうかがわれる。例えば茂県三龍郷では、代々旱魃時に雨乞いを主催してきた家系があり、1970年代にも数回、山頂の湖で儀式を実施したという。また北川県青片郷では、草で「水龍」を作り、大井戸まで運んでそれに水をかけて焼く。

（3）　ウルピとラシとラ

チャン族は、かつて白石［ʁlupi］を神の表象として崇めてきた。しかし現在では、これを茂県赤不蘇区雅都郷一帯（以下、赤不蘇で記す）や黒水県以外の場所でみることはまれである。よって以下では赤不蘇の事例によって、［ʁlupi］を中心とした彼らの信仰の形を考察する。

［ʁlupi］は、乳白色の石英石で岷江上流域に産する。北部方言では［ʁlupi］、南部方言では［lupi］という。伝説によれば、昔、チャン族の祖先が敵と戦った時、夢の中で神からこれを武器として賜り、勝利した。そこでそれを記念して、これを家々の屋上や集落を守る神の山の山頂に祀った。以来、［ʁlupi］は神の表象として崇められるようになった。

［ʁlupi］の形は、一般に高さが30～50センチの山型である。かつては、家を新築した時には必ずこれを奥深い山中から運んできて屋上の中心にすえ、毎月1日と15日にコノテガシワの枝を燃やして祀った。また［ʁlupi］は山頂にも置かれた。赤不蘇では、山頂の［ʁlupi］には山神菩薩が来る、家の屋上の［ʁlupi］には菩薩（「房神」）がいるという。また近隣の曲谷郷に伝わる「敬山神歌」では、山神は天より下ると歌われ、維古郷では、山頂と家の屋上の［ʁlupi］は同じ神を表すと語る。すなわち、各処の「ラシ」に宿る神は同一神で、「ラシ」を経路として天から山へ、山から家々へと垂直に去来する。山頂にあっては山の気

候や獣たちを管理する神となり、屋上にあっては家および家人を守る神となるのである。

よって家々の窓や入り口、屋上の四隅にも小さな［ƀlupi］がぎっしり積み上げられ、集落の入り口に積まれることもある。それは、家の内と外、集落の内部と外部という境界を越えて入りこもうとする災いや邪悪な存在を［ƀlupi］が防ぎ、追い払うと信じられているからである。また［ƀlupi］は病を払う場合や墓地にも力を発揮すると信じられている。当地では病人がでた時には室内に細かく砕いた［ƀlupi］をまき、棘のある枝で室内のあちこちを打って「病鬼」をおいだす。また隣接する理県下孟郷では、石を積み上げた墓の上に［ƀlupi］を置いて、邪鬼が死者に侵入することを防ぐ。

［ƀlupi］を置く聖域は、高さ2メートル、幅1メートル弱の、細かい石を方形に積み上げた塔「ラシ」である。上方には［ƀlupi］を1個あるいは数個置き、儀式で犠牲にされたヤギ「ツァ」の角を掛ける。下方には凹部があり、そこでコノテガシワの枝を燃やして煙をあげ、神を祀る。「ラシ」の裏側には、4〜5メートルの［lɤ］（スギの枝）ないしは竹を挿す。「ラシ」は、新築時に家屋屋上の片側の中心部分に設けられるほか、集落の神山の山頂や神林の中、高さ数十メートルの巨塔の頂上などにも設置される。そこでは様々な儀礼活動が行われる。例えば山頂の「ラシ」では祭山会や雨乞いの儀式、屋上の「ラシ」の前では新築祝い、収穫の祝いなどが行われる。また結婚式や葬式、春節の時にも「ラシ」の前でコノテガシワの枝を燃やして神を祀る。

［lɤ］（スギ）も神の依り代である。それを選びだすにあたっては厳格な規則が定められている。［lɤ］は長さが3〜7メートルのまっすぐな枝で、5、7、9本のいずれかの数の小枝がついていなくてはならない。［lɤ］を伐採する時は、村人の中から選ばれた男性が、ふだんは伐採の禁じられた神林に入って捜し出す。山から切り出された［lɤ］は、口にはさみ、きまった道を通って村まで運ばれる。また［lɤ］の経文「ピヤタサ」（汶川県龍渓郷）によれば、神聖な［lɤ］の所在は神や「シピ」、深山の鳥獣、奥深い山にわけいる狩人や薬草取りにしかわからず、切り出し方や運び方、挿し方などにも細かいきまりがある［四川省編輯組 1986：174-175］。

また［lɤ］は地域によってその形や働きが異なっていた。山を隔てた三龍では、［lɤ］に「シピ」が五色の紙をつける。これを「シジョ」とよぶ。「シジョ」は、5月の祭山会の豊作祈願で重要な役割をもつ。祭山会では、額に小さな［lɤ］を挿した「シピ」が、「シジョ」の傍らで経文「リクチク」を唱えながら「リゴ」（羊皮鼓）を打つ。経文では、「我らは、ここにシジョを挿して神に願う。地上の一百のシピよ、天上の一万のシピと一万の神霊よ、我らを助けたまえ。神よ、我らにチンクー麦を授けたまえ」と唱える。「シピ」は、「リゴ」をしだいに速く打ち鳴らし、やがて恍惚状態におちいると、突然大きく跳躍する。と同時に、「リゴ」のなかにチンクー麦の飛び込む音がして、種子が現れる。これによって豊穣が神によって約束されたとみなされた。

以上のようにチャン族の信仰は石塔「ラシ」によって具象化されている。「ラシ」は[ƀlupi]や［lv］という依り代をもった聖域として各境界に設置され、神を招き、その力によって邪悪なものの侵入をふせぐと信じられてきたのである。赤不蘇や黒水、理県の一部地域では、現在もなおその信仰は根強く残っている。しかしチャン族地区の3分の2以上の地域を占めるチャン語南部方言圏では、すでに早い時期から「ラシ」や［ƀlupi］の姿はほとんどみられなくなってしまった。以下ではこれらの消滅の要因とその意味を、汶川や理県の事例で考えていきたい。

汶川や理県では、[ƀlupi] はすでにほとんど消滅しているにもかかわらず、その形態や意味は北部の伝承よりも多様で豊富である。

［ƀlupi］の形態については、汶川や理県では地域によって「ラシ」に置かれた［ƀlupi］の数が異なり、その表す神も一様ではない。例えば理県桃坪郷では［ƀlupi］の数は3個で、天・山・樹木の神を表す。また汶川県雁門郷では5個で、天・地・山・「山娘」・「関聖」の神、茂県三龍郷も5個で、天・地・山・火・龍（水）の神、汶川県綿池郷では7個で、天・樹木・「雪龍玺」山（汶川県と理県と小金県の境にあって、南部チャン族の聖山とされる）・白山・黒山・地盤業主（集落の開祖）の神を表す。ただしこれらの神々は、山や天のイメージから分化されたもので、個々に独立して存在するものではない。しかし山と天については、北部方言地区では山神と天神が未分化であるのに対して、南部方言地区では天神と山神は異なるものとしてある。また南部における天神には、少なくとも3つの性格がみいだせる。

第1は、チャン族の祖先に［ƀlupi］を与えて先住民「戈人」との戦いに勝利させた神である。これは、チャン族の移動と定住を語る史詩「羌戈大戦」に登場する。特に汶川県の綿池や雁門、龍渓の各郷や理県の蒲渓や佳山の話では、先住民戈人が密かに神の牛を食らったためにチャン族の祖先は天命によって戦ったとし、チャン族の土地占拠の正当化を主張する。すなわち南部では、他民族集団との接触や抗争が少なくなかったために、移住の正当性を主張し団結を促すという社会的役割が強く語られていったものと思われる。

第2は、ある社会の長を反映した天神である。これはチャン族の始祖となった天女ムジジョとチャン人の男ルピアとの婚姻を語る伝説「ムジジョ」に登場する。「ムジジョ」は南部地域独自の話で、北部ではみられない。その概要はつぎのようである（汶川県綿池郷）。

天神ムピタの三女ムジジョは、放牧をしていたチャン人の男ルピアと出会い、結婚を約束して共に天界に行く。天神は反対し、難題をだす。ルピアは、決められた時間内で木を伐る、野を焼く、種を撒いて回収するなどの難題を、ムジジョの助けで解決する。結婚後、2人は人間界で農業を主として暮らしをたて、新たなきまりやタブーを定めてチャン族社会を作っていく。またムジジョは天界の実家をしのんで5個の［ƀlupi］を家の屋上に祀った。一方、下界には様々な災いがあるのを知ったムピタは、ムラ（天界のシャーマン）を

人間界の妖魔鬼怪や災いを駆逐させるために下凡させた。

この伝承で注目されるのは、[mə]（火）との関連である。まず天界の人名は、ムピタ、ムジジョ、ムラとみな［mə］（火）を共有する。つぎにムジジョが天界を表すものとした［ɓlupi］は、実は、彼らにとっては生活に不可欠な火打ち石である。南部地区には、太陽神ムニシと山神ウパパシの間にうまれたチャン族の始祖ルピアが、天界から［ɓlupi］に隠して火を盗んできたという伝説「燃比佳取火」が伝えられている。さらに天神ムピタがだした難題は、明らかに焼き畑の技術を反映したものである。このような焼き畑にまつわる難題婿のモチーフは、雲南の山地少数民族にも語られており、チャン族の南下と南方の山地民との接触を示唆するものと考えられる。

第3は「漢化」した天神である。チャン族地区では清代中期頃から「改土帰流」がすすみ、支配層が率先して漢式の習俗をとりいれていった。「漢化」は、特に漢族との接触が増えた南部方言地区ですすんだ。天神も多くの地域で「玉皇大帝」にとってかわられた。例えば汶川県龍渓郷では、村の神樹林に4個の［ɓlupi］を置き、それぞれを玉皇大帝・川主・山王・寨神（有能で、村のためにつくした村人を死後、神として敬った）として祀った。このうち玉皇大帝と川主は、漢族の道教の最高神と灌県の二郎神であり、元来は天神である。

以上のように、南部方言地区の信仰や伝承には漢族や南の少数民族のもつ異文化の影響と変化が明らかである。特に漢族式の廟が集落内に建てられて「ラシ」にとってかわり、廟内に［ɓlupi］にかわって神像が安置されるようになったことは、変化の大きな契機であった。チャン族が元来崇めていた最高神は、去来することによって各處で役割を担っていたが、それは、伝来した漢族の神々によって定住化され具象化された玉皇大帝・観音大士・山神・青苗土地神という形に分化していった。さらに個人の家屋にも、イロリのきられた中心の部屋の角に漢式の神棚が作られ、「天地国親師位」や漢族の七尊神の名を書いた紅紙が張られるようになった。

そして［ɓlupi］のもつ力も北部と南部では次第に意味を異にしていった。［ɓlupi］に「駆邪」の力を託す北部に対して、南部では早い段階で「羌戈大戦」などを語る特定の経文の言葉が強い「駆邪」の力をもつとされ、［ɓlupi］は装飾と伝えられるに至っていた。例えば史詩「羌戈大戦」は、雁門郷の経文「ピグニ」や綿池郷の「ド」の中で、山野の鳥獣が作物を食い荒らしたり、雨や風、雹などの自然災害が作物に被害を及ぼすことのないように山神に祈願し、その害をはらうために行う際に唱えられた。また「羌戈大戦」を語る龍渓郷の「グジガブ」は、祭山会での農害駆逐の場面だけではなく、実際に農作物や人、家畜が被害を受けた時にも唱えられた。蒲渓郷の「ガジガク」は、凶死者のためにけがれを払う時にも唱えられた。

しかしその一方で、山頂に設けられた「ラシ」は、文化大革命で徹底した破壊を受ける

までは［ƀlupi］を擁した元の形のまま各地に存続し、雨乞いなど臨時緊急的な儀礼は続けられていたという。

以上のように南部地区における「ラシ」を中心とした信仰の形は、異文化との交流によって多様に変化していった。特に具象化という点において優れていた道教や仏教の神々は神像という形態によってチャン族の神を具象化し、分化させていった。ここに「ラシ」や［ƀlupi］の消滅の要因と意味があったと思われる。

6．葬式

（1）　火葬（イラスト 25）

火葬は、チャン族の伝統の葬儀である。一般に、チャン族社会は父系社会であるため、一つの父系親族集団は定住の土地に必ず専用の「ムプ」（火葬場）をもつとされる。

「ムプ」は、一族のみが使用を許される火葬場である。また火葬後の骨灰はそのまま埋めてしまうことから一族の墓墳ともなっている。よって同一父系とはみなされない入り婿や他姓の者は使用することができない。ただし慣習として、「ムプ」をもたない一族は、酒や［pis］などを持って他姓の「ムプ」の使用を願いでることができる。換言すれば、「ムプ」の有無や集落内のどこにそれがあるかということは、それぞれの集団の移住の歴史や集団間の勢力関係に関係しているといえよう。

ところが後述するように、清代中期頃から土葬がとりいれられるようになり、現在では多くの地域で土葬が普及している。伝統の火葬は、チャン族居住区西北部の茂県沙壩区や赤不蘇区などごく一部で行われているにすぎない（図 14）。あるいは死者が生前特に希望したり、遺族の決定があったときには火葬を行うという地域もある。ただし火葬は、凶死の場合には必ず行われる。転落や事故、伝染病や難産などによる死者の魂は、凶悪なものに形をかえて生者に災いをもたらすと信じられているからである。その場合には、まず「シピ」を招いて経文をよんでもらい、招魂した後に荼毘にふすが、一族の「ムプ」を使用することはできない。

死は、チャン族にとって西北の故地へ帰ることであり、その旅立ちである葬儀は盛大であればあるほどよいとされる。よって葬儀は個人にとっても集落にとっても最大のイベントとなる。一般に、参列者は数百から数千にも及び、葬家は年収の数年分に該当する経費を費やす。また集落では、成人男性が葬式組を組織して葬儀の運営にあたり、女性は遠来の参列者の世話を受け持つ。例えば 1989 年 1 月に茂県曲谷郷河東村で行われた県政府幹部の妻の葬儀は、参列者が約 2000 人を上まわり、宴席には 60 を越える卓が用意されるほどの盛大なものであり、葬家は大いに面目をほどこした。しかし同年 2 月の茂県赤不蘇区赤不寨村で行われた葬儀では、約 400 人が参列して 2000 元あまり（当時は 1 元が約 25 円）

の経費が費やされたが、平均よりも小規模であったうえに、生前から準備しておかなければならない物品が間に合わなかったなどの不手際が重なった。そのため死者の実家の兄弟は喪主に対して口々に不満をのべ、周囲の者達は、家屋を新築中だったために葬家は十分な葬儀を行えなかったのだと噂した。遺族は最大の恥辱を受けることになってしまった。

以下では、何代にもわたって火葬を続けてきた赤不蘇区での火葬を事例に、チャン族の伝統的な葬儀の現況を明らかにしていきたい。

赤不蘇区は、雅都、曲谷、維城の3郷からなり、総人口は約6300人、そのうちの97パーセントがチャン族である。日常会話にはチャン語が使われ、葬儀も8割強が伝統的な火葬を行う。漢族は少数派で、1935年にこの土地を通過した紅軍の残留者と人民共和国成立後に数年交替で郷政府に配属される者である。歴史的にみると漢族との接触が稀薄であり、他地域に比べて「漢化」が浅い。むしろ同じチャン語北部方言を話す山向こうの黒水のチベット族との婚姻関係が古くから盛んであったために物資の交流や出稼ぎなどにおいて北西のチベット族との接触が多く、服飾などにチベット族の影響がみられる。しかしチベット仏教は信仰していない。

1989年1月2日、赤不蘇区雅都郷中心村では朝から住民が慌ただしく動き回っていた。赤不蘇から黒水に嫁いだ女性が亡くなったために、女性の実家では男性たちがトラックの調達や酒や線香の買いだし、チンクー酒の甕の用意などに走り回っていたのである。女性たちも葬家に送るための［mumu］を急いで焼いた。［mumu］は背負いカゴの口をふさぐほどの直径40センチ位の大きさで、月型と太陽型の2種類がある。昼前、十数人の親類の男女は供物を揃えて慌ただしく黒水へ向かった。

赤不蘇区では最初の死者が女性であった場合には、その年は年間を通じて葬式が多いといわれている。その言葉のとおり、18日には近くの河東村で女性が亡くなり、月末には中心村の王家の老女が逝き、翌月4日には赤不寨村の楊家の老女がまた亡くなった。

雅都郷赤不寨村の老女の葬儀（1989年2月）はつぎのように行われた。楊家の老女は、57歳で病のために亡くなった。名前はズシム、人民共和国成立以前に生まれたために漢語の名前をもたない。夫はすでに他界している。2男1女があり、長男の家族と同居していた。習慣では、60歳を越えてからの病死は寿命を全うしたとみなされ、死後3日目に焼かれる。60歳未満で亡くなった場合は、早めに火葬するか、あるいは焼かない場合もある。ズシムは60歳以上の死者の場合と同様の葬儀が行われることになり、火葬は7日に決まった。ズシムの長男は、すぐに黒水の母の実家に知らせをだした。赤不寨村は、総戸数が28戸、王姓が7戸あって最も多く、ほかに余、白、何、陳、楊の5つの姓がある。このうち王姓、白姓、何姓、楊姓が火葬を行い、余姓と陳姓は土葬を行う。ところが村内には西のはずれに王姓の「ムプ」が一つあるだけで、他姓のはない。そこで白姓や何姓、楊姓は、火葬を行う場合にはいつも酒と［pis］をもって王家に挨拶に行き、使用させてもらってい

た。そこで今回の楊家の場合も、死後すぐに王家にでむき、「ムプ」の使用許可をもらった。

4日、ズシムが亡くなると、実の娘と長男の嫁は、ただちに母の顔と体を清水で拭き、ヤギの毛で織った黒い長衣を着せて、足には赤い布靴をはかせる。衣服や布靴は生前から準備したものである。遺体は、2階のイロリのある部屋の東の角に置かれた椅子に、顔を西にむけて座らせ、足の下には［pis］と穀物を入れた笊を置いてふませた。男性の場合は食糧を詰めた篩を置く。

遺体のまわりには、その両側に、黄や緑、赤など色とりどりの細長い紙で作ったカサや、紙製の銭や硬貨を吊して山型に作った紙の樹を置く。また椅子の前には、親類から贈られた酒の甕や、米飯やチャン族式漬け物である酸菜、クルミや菓子類を盛った数個の椀、ロウソク、線香などを供える。さらに遺体を置いた東側に幅広の白布を垂らして、遺体の置かれた場所と生者の居住空間をしきる。なお家の入り口は葬儀が終わるまで閉めてはならず、遺族はこの日から5日間、村内の家を訪問してはいけないとされている。

ところでズシムの長男には、第1日目から大きな落ち度があった。赤不蘇区では、両親が老いてきたら、子供は両親のために準備しなければならないものが2つある。死者のための椅子と「ムプ」に置く小屋である。ズシムの場合、まだ50代であったことや、それほど重い病気ではなかったのに急に亡くなったために、2つとも用意が間に合わなかった。これは長男にとって大変な恥であった。結局、椅子は親しくしている老人から借りてきて使い、後で新しいのを作って返すことにした。また小屋は高さ2メートル、幅と奥行きがともに1メートルで、3面を壁で囲って外壁に太陽と月の図案を入れたものであるが、これも人に頼んで大急ぎで作ってもらった。

一方、村内では党書記が葬式組を組織し、葬儀の際の村人の仕事の分担を決める。最初に、年長で信望のある者の中から全体をとりしきる「総管」を選び、以下、客の接待をする「外管」、葬式の進行を受け持つ「内管」、参列者の食事の準備をする「管飯」、参列者の受付をする「管卓」、会計係りの「管銭」、灯明をみはる「管灯明」などの分担を住民に割当てる。全員、男性である。女性は、葬儀においては表立った役割は担わない。また村内の各家では、葬儀期間中につぎのような物品の供出や手伝いを行う。宴会の準備に必要な炊事道具や食器類、その他を貸し出す。直径30センチくらいの丸型の［mumu］とロウソク1対、線香3本などを楊家に送る。遠方から参列に来る人々を、各家が分担して5～10人前後あずかり、帰るまでの数日間の食住の世話をする。火葬の日までの数日間、交替で遺体に昼夜つきそう、などである。葬家側は、村人のそのような協力に対して、葬儀の一切が片付いた後にチンクー酒の甕を用意して皆を招き、もてなしてお礼とする。金銭でお礼をする習慣はない。

弔問客からは、死者や葬家との縁故関係の程度によって様々な香典が送られる。例えば葬家の兄弟や母方の実家などは、現金数百元や「孝衣」、甕入りのチンクー酒、［pis］など

を送り、経費や人力など様々な面でできる限りの援助を行う。彼らの社会では正式な贈答品は酒や［pis］である。これらをどのくらい送るかは死者との関係によるが、送り主の社会的地位や財力をも示すものである。一般の弔問客は酒や線香、乾麺、現金 2 ～10 元程度を送る。誰が何を送ったかは「管卓」によって記帳される。［pis］については、送り主を火葬後の宴上で全員の前で公開し、親類縁者に分配する。

6 日の夕方、死者の弟とその家族、親類らの一行が黒水から赤不寨村に到着。チンクー酒一甕と［pis］、直径 50 センチほどの［mun mumu］（「太陽饃饃」）と［tʃhəşa mumu］（「月亮饃饃」）、現金などをもってくる。楊家は、村の入り口で一行を迎え、一人ひとりに酒をふるまう。

母方のオジが到着した夜、母方側と葬家側は、深夜まで、酒を酌み交わしながら歌の応酬をする。母方側は、葬家側に死者の死の原因や看病を尽くしたかを問い、さらに死者に対する賞賛と慰めの言葉を述べた。葬家側はそれらに一つ一つ答えたうえで、「到草地買毛牛」（北の草原地区にヤクを買いにいく）や「到茂県買酒」（県城へ酒を買いにいく）と唱って、盛大な葬儀を行おうと努力していることを示す。

死者の弟、すなわち母方のオジは葬儀では強い発言力をもつ。葬家に対して死者の死の状況を尋ね、遺体に対面してその死が正常なものであったかを確かめる。姑にいびられての自殺や納得のいかない死に方をしていた場合、母方のオジは、一族をひきいて嫁ぎ先に出向き、そこに 3～4 日間いつづけて家じゅうを叩き壊し、さらに慰謝料を要求する。その間の食住の世話はもちろん嫁ぎ先の負担である。かつて村内でもそのような事があったという。ズシムの場合は、死が突然であったために生前に用意しなければならない椅子や小屋がまにあわず、母方オジから厳しい叱責を受けた。それはズシムの長男にとって堪え難い恥であった。

翌 7 日の早朝、火葬用の薪を集めるために、各家から一人ずつでて、奥の山の共有林に出かける。火葬の時は、一家が一抱えずつの薪を供出することになっている。

10 時。3 人の内管が、つぎの順序で「ムプ」を開いた。楊家のイロリから火種を「ムプ」まで運ぶ。「ムプ」の入り口でコノテガシワの枝に火種をつけて燃やし、煙をあたりにまわしながら酒と酸菜をまく。ニワトリの首に小刀をあてて血を取り、その血を「ムプ」の四隅を一巡しながら周辺にまく。以上が終了した後、銃声が 5 発鳴らされる。

10 時半。前夜まで「ムプ」へ行く道の途中の空き地で作られていた小屋を「ムプ」へ運ぶ。小屋は、壁のない一面を西に向ける。

薪を取りに行った者たちが「ムプ」に到着。同時に楊家の新築中の敷地の空き地では、火葬後の宴のための食事の準備が「管飯」らによってすすめられている。参列者は、楊家の前で記帳し、現金 2 ～10 元や乾麺数束、酒などを送る。

12 時。遺体が家を出発。銃声を合図に、人々は隊を作り、昔から決められた道を通って

「ムプ」に向かう。隊列は、先頭が女性の遺族と村の女性達で、手に紙銭を持ち、何度も後ろからくる遺体の方をふり返りながら、泣き、唱う。次は楽器を鳴らす者と供物やカサを捧げ持つ者。3 番目は椅子に座った遺体とそれを運ぶ遺族。最後は村の男性達と続く。12 時 10 分。遺体が「ムプ」に到着。遺体は、顔が西向きになるように、椅子に座らせたままの姿勢で小屋の中に置かれる。隊の先頭を歩いた女性の遺族と村の女性達が、死者に向かって叩頭し、ひとしきり泣いた後、女性達はそのまま村にもどる。

銃声を合図に、小屋の中と外に薪を積む。遺体の顔を覆っていた白布がとられ、口に酒を含ませ、体全体にも酒がふりかけられる。

12 時半。銃声を合図に、楽隊に先導されて、[mumu] やリンゴ、ゆで卵、クルミなどの供物と紙銭を持った女性の遺族と村の女性達が、再び「ムプ」に到着。最後の別れを交わして、遺体と小屋、積み上げた薪など全体に油がかけられる。

銃声を合図に、ズシムの長男が薪に火をつける。右手に小刀を掲げもった母方のオジが、燃える遺体の傍らで、死者を称える言葉を述べる。

1 時。女性達は全員、先に楊家に戻り、男性達は近くで酒を飲んだり、歌を唱ったりしながら、遺体が燃え尽きるのを見守る。係りの者は、大きめの木材を足しながら火の勢いを調節。

3 時。「ムプ」の横の広場で、男性達 40～50 人による「舞」が始まる。これは 60 歳以上の者が寿命をまっとうした場合に行われるもので、戦いの場面を再現したものとされる。ズシムの長男が銃声を放つと同時に、広場の東北の角から、男性たちが、ホーッホーッという叫び声をあげながら、一列になって、まっすぐ走りこんでくる。先頭は小刀を掲げた「算命先生」で、後ろには銃や小刀、棒を手にした男性たちが続く。

列は、広場の中央を蛇行しながら横切り、東側でふたてに分かれる。向かいあった 2 列は、手にした銃や刀、棒などの武器を打ち交わし、戦う。2 列は再び 1 列になり、広場の南側を東から西へと走る。

西側では、踊りを終えた男性たちが葬家の若者に迎えられ、酒とブタの内臓が一人ずつにふるまわれる。

3 時半。男性たちは「ムプ」にもどり、酒を飲んだり、送魂の歌を唱いながら、遺体が燃え尽きるのを待つ。

4 時。遺体が燃え尽きたのを確認。慣習として、骨灰は拾わず、そのまま灰で覆って放置する。男性達が「ムプ」から楊家にもどる。楊家では、家屋の入り口前に麦藁を燃やした焚き火を用意する。男性達は火をまたぎ、長男の嫁が用意した冷水で手を清めて室内に入る。

4 時半。楊家の新築中の空き地に設けられ宴席に参列者が集まる。参列者は 20 人くらいが 1 グループとなって地面に円座する。男女は別々である。今回は死者が女性だったので、

参列者にも女性や子供が多い。母方の親類のためには、特に「火鍋」（シャブシャブ式の鍋物）を置いた卓を3つ用意する。

空き地の中央には、以下の品々が置かれる。ヤク一頭分の肉。ヤクは前々日の5日に「ムプ」で殺し、あぶっておく。チンクー酒ひと甕。「白酒」48本。［pis］ひとかご。［pis］は死者の実家や親類、親しくつきあっていた者などから贈られたもので、ひとつひとつに贈り主の名前が記される。集落の各家から一つずつ届けられた［mumu］ひとかご。ゴマせんべいひとかご。

宴がはじまると、まず、党書記が贈られた［pis］をひとつずつもちあげて、贈り主の名前を呼びあげる。ズシムの長男は［pis］と［mumu］を親類や世話になった人々に贈る。つぎに党書記が、楊家の長男に代わって、参列者に参会の礼を述べる。

銃声が響き、爆竹がはぜ、楽器が打ち鳴らされると、手伝いの若者が、参席者に酒やおかずを配ってまわる。おかずはつぎの7種類である。牛肉とジャガイモの煮込み、白菜と猪票の炒めもの、牛肉・人参・青菜・ネギ・ニンニクの芽の煮物、はるさめの炒めもの、豆腐とネギの煮込み、煮込んだブタの臓物、豆類を煮た物。

各グループには、洗面器とどんぶり一碗、箸一膳がわりあてられる。洗面器は円の中央に置かれ、そこにおかずが配られる。酒はどんぶりをまわして飲み、おかずは箸をまわして、あるいは手でそのまま取って食べる。

5時半。母方側を代表して、ズシムの弟が死者を称えるスピーチを行う。

楊家は、参席者ひとりひとりにつぎの品じなを配ってまわる。糸、針、タバコ2〜3本、アメ、クルミ、ゴマ煎餅、リンゴ一片、トウモロコシ・チンクー麦・黄豆・ソラマメ・黒豆・麻など6種類の作物の実を少しずつ手渡す。

6時。参席者は三々五々帰り始め、遠来の客は、再び村内や近くの村の知り合いの家に分宿。

8日は、早朝、ズシムの娘と嫁が「ムプ」に「脚影」（灰の上についた足跡）を見にいく。死者は、足跡をつけた生き物に生まれ変わると信じられているからである。

昼には、前日と同様に客を送る宴が開かれ、葬儀はすべて終了する。

後日、葬家は集落の住民を招いてチンクー酒をふるまい、葬儀の手伝いのお礼とする。葬式組の「総管」は、今回の葬儀についてつぎのように総括した。この火葬は、赤不蘇村で従来行われてきた伝統的な火葬の手順にならって行われた、しかし遺体が燃え尽きる前に演じられた「舞」は死者を英雄としてたたえるための踊りであるが、本来はもっと多くの成人男性が武器を手にして演ずるものであった、またかつては近隣に宗教職能者がいて葬儀をしきっていたと伝えられているが、そのような者が当地からいなくなって久しく、現在は「算命先生」がいて葬儀の日時などを占ってもらう、と。

（2）　土葬

チャン族地区で土葬が行われるようになったのは、「改土帰流」がすすめられた18世紀から19世紀半ばの清代中、末期であろうと考えられる。

かつて汶川県龍渓郷では、埋葬の前の夜に死者の母方の叔父と葬家との間で「迎接舅舅」や「為死者熱鬧一夜」などの「葬歌」の応酬が行われたが、その時に母方叔父はつぎのような一段を歌ったという［四川省編輯組 1986：185］。

康熙四十二年前、羌人死後不用棺、草連軟裹架柴焼、姓姓都有火葬場。

四十二年天下乱、乱後羌人就大朝。人死須穿六件衣、装入棺材用土埋。

習俗大変行、人畜興旺万民安。

これによれば、龍渓郷では康熙42年（1703）に火葬から土葬へと大きく変わっている。康熙42年とは、現在の北川県の壩底堡や青片溝一帯を管轄していた石泉土司の唐徳峻が、所轄内のチャン族の訴えにより土司を解かれて「改土帰流」された年である［冉光栄・李紹明・周錫銀 1985：252］。龍渓は、順治6年（1649）以来龍安府に属する龍渓堡土知事の統轄下にあったが、石泉土司の所轄地域に隣接しており、「改土帰流」以後に奨励された土葬が当地にも次第に浸透していったものと思われる。また『古今図書集成』職方典巻593によれば、「臉用棺槨、築墳以葬、悉如華制、人羨其善変」とあり、現在の茂県の北門や渭門溝河西一帯を管轄していた静州長官司は、嘉慶22年（1817）に母の葬儀に初めて漢族式の土葬を行い、それが「善変」と賞賛されたとある。

各地の住民の話によれば、土葬の普及は、汶川県龍渓郷では清代中期頃、茂県鳳儀鎮一帯では清代末期、茂県黒虎郷では200年ほど前の清代末期、茂県渭門郷では民国に入ってからだという。

すなわち清代中期以後、清朝は土司の勢力を抑えるために茂州（現在の茂県鳳儀鎮）以南を中心に「改土帰流」をすすめ、一方で、漢族の流入と定着を奨励した。さらに鎮や公路沿いの漢族集落周辺のチャン族集落を「漢民里」に編成して、住民を「漢民」籍に変更した。チャン族住民は納税や徴兵のために新たに漢族式の姓をつくり、言語や服装、信仰、冠婚葬祭などさまざまな面に漢文化を受容していった。特に土司層や富裕なチャン族上層部は、清王朝の直接統治下で従来の支配力を維持するために積極的に漢文化を吸収していった。雍正8年（1730）には、チャン族はすでに漢族と同等に「科挙」に応じていたことが記されている［道光『茂州志』巻2］。火葬から土葬へという変化も、このような上層部に始まる積極的な「漢化」のひとつとして、次第に一般にも普及していったのであろう。

しかし新たに導入された土葬にも、かつての火葬を連想させる風習や古来の手順が根強く継承されている。例えば1998年に行われた龍渓の土葬では、死の直後にヤギを殺して死者をあの世に導く「引山羊」とする、「シピ」と「ガサ」が「駆邪」や「招魂」の儀式を行う、埋葬の前夜に母方叔父と葬家の間で「葬歌」を応酬する、墓地で埋葬する前に棺桶の

底に敷いた麦藁を焼くなど、葬法の変化にかかわりなく古来のやり方が行われている（表9)。

（3）　弔いの踊り

葬儀の時に演じられる弔いの踊りは、チャン族の踊りの中でも特に民族的色彩を色濃く残すものである。それは功績のあった戦士の死を悼むための踊りである。チャン族は 60 歳以上の死者を「戦士」とみなし、その葬儀には必ずこれを演じる。

弔いの踊りは、チャン語では「ムジュフ」（北部方言地区)、「ガタ」（南部方言地区）とよばれ、漢語では「跳灰甲」「鎧甲舞」「大葬舞」と表記される。漢語名は、この踊りが両親の死後数年たって行う「大葬」の時に、鎧甲をつけた戦士の扮装で演じることに由来する。ただし赤不蘇区では、「大葬」は 1950 年代を最後に行われていない。

「大葬」の最終日に演じられる「ムジュフ」は、葬儀時のそれよりも一層華々しく演じられる。演者は「シピ」が 9 名、親族の男性が 8 名、男性 100 名あまり（数は不定）で、隊列の先頭には、「シピ」のうち最も名声のある者が牛皮製の鎧兜をつけ、右手には刀を、左手には先端に牛の舌をさげた銃を持って立つ。その後ろには、面具をつけ、右手に羊皮鼓を、左手に銅鈴をもった 8 名の「シピ」、さらに同じいでたちをした 8 名の親族が続く。最後は 100 名ほどの男性たちが、右手に刀を、左手には銃を持って並ぶ。隊列は、まず一列になって歌いながら踊り、踊りながら歌いつつ、長い陣形のまま「ムプ」の周囲を 3 回まわる。続いて広場に移り、蛇行しながら、2 列でむかいあう対陣形に変化し、再び一列の陣形にもどる。踊りの後には宴が開かれ、石や板の上に並べられた酒や肉を手づかみで食べる。

弔いの踊りは、牛皮の鎧兜を身につけるのが特徴である。しかし人民共和国成立後に続いた度々の政治運動のために鎧兜のほとんどは失われてしまった。また弔いの踊りも、皮鼓を使用した舞が近年各地でようやく復活し始めたばかりである。

このようななかで、茂県渭門郷は、「シュ」（宗教職能者）の伝統を守り[24]、鎧兜を失った後も「ガタ」（「鎧甲舞」）を行ってきた数少ない地域の一つである。総人口は約 6000 人、茂県の県城から東へ十数キロの山間に位置する。住民のほとんどがチャン族である。椒原、圓芸、渭門、核桃溝、木耳、六同、道才、徳勝、永和、拿朴、牧場の 11 の行政村が、渭門溝をはさんだ両側の山腹に散在する。このうち永和村は、最も海抜高度が低くて約 1500 メートル、車は河谷にあるこの村までしか通れない。人口約 700 人、戸数約 130 戸で、姓は、何姓と張姓がそれぞれ 30 パーセントあまりを占めて最も多く、ほかに楊、呉、李、余、許、董、文、白の姓がある。村内には 6 つの「ムプ」が残っており、100 年くらい前までは火葬を行っていた。しかし張姓の最も早期の墓碑に光緒 4 年（1878）の記載があることから、およそ清末民国初期の頃から徐々に土葬が行われるようになり、ついには火葬をすると子孫が繁栄しないといわれるようになって、現在では土葬のみが行われている。

永和村から山道をさらに1時間ほど上った拿朴村は、戸数178戸、人口1018人で、ほとんどがチャン族である。漢族は20人いるが、全員が民国以降に当地に来た者たちで、1935年の紅軍の残留者や国民党の徴兵を逃れてきた者、臨時雇いをしながら流れてきた者などである。白姓が全体の約60パーセントを占めて最も多く、ほかに羅、王、龍などがある。各姓はそれぞれ固有の「ムプ」をもつが、葬儀は土葬である。筆者が参観した「ガタ」はここで行われた。

渭門郷の住民は、かつて家計の不足を補うために、農閑期の冬の3ヵ月間を中心に毎年出稼ぎに出ていた。出稼ぎは、茂県から松潘まで茶を背負う運び屋や成都盆地での井戸掘りや堤防作りであった。渭門郷では恒常的な出稼ぎのために早くから漢族との接触が頻繁で、男性には漢語を話せる者も少なくなく、漢族式の土葬も比較的早期に普及した。またサンショウの特産地としても知られ、1980年代以降はサンショウやリンゴの販売で現金収入の伸びが著しく、漢族式の家屋への建て替えやテレビなどの普及が進んだ。

しかしそのような「漢化」の反面、郷内には5人の「シュ」が健在であり、人民共和国成立後になしくずし的に「シュ」が消滅していった他の地域にくらべて特殊である。郷内には、永和村に何昌徳（76歳）と楊永清（70数歳）、何清雲（60数歳）、拿朴村の拿朴組に龍国治（64歳）、下奪米組に30数歳の者などの「シュ」がおり、「シュ」の伝統を継承する弟子も3人育っている。当地の古老の話によれば、住民は政治運動のたびに様々な形でによって「シュ」を守ってきたという。また彼らは、外来の漢族に対して武力によって抵抗したという歴史も有する。アヘンの原料となるケシ栽培が盛行していた1937年、栽培禁止令を名目にケシを強制的に没収する政府軍に対し、渭門の住民は溝口の劉元通をリーダーとする反政府の戦いに参加した。結果的には制圧されてしまったが、以来「洗漢」（漢族を排除する、追い出す）を意味する言葉が郷内で語り継がれたという。このように現在も葬儀で「ガタ」を行う渭門郷は、表面的には「漢化」が進んでいるものの、為政者に対する姿勢は歴史的に「面従腹背」であり、現在も自民族意識を強く継承する地域であるといえよう。

最年長の「シュ」である何昌徳は、「ガタ」についてつぎのように説明した。「ガタ」とは、「ガサ」（白馬将軍）の子弟で、チャン族の武士であり、「鎧兜舞」で棒をもつ者である。また「鎧兜舞」そのものも「ガタ」とよぶ。「ガサ」は死者のために「開路」（あの世へ導く）する人である。「ガタ」は、死者を「亡香台」に送るために行う。60歳以上の老人だけがこの舞を受ける資格をもつ。なぜなら60を越えて亡くなった者はあの世で神となるが、60歳未満の死者は神にはなれず、「短命鬼」になるからである。

葬儀では、「ガタ」は2回演じられる。屋内で遺体へのつきそいを始める時と墓地で遺体を埋葬する時である。まず屋内では、亡くなったその夜、遺体の傍らにヤギが引かれてくる。そして遺族が頭にまく白布を、一方はヤギの角にまきつけ、もう片方を棺桶にまく。

角に白布をかけるのは、ヤギが死者をあの世にうまく導くようにという願いからである。「シュ」は、隊を率いて棺桶の周りをまわりながら歌い、踊る。歌詞の大意は、「死者の魂よ、昇天の途中で関門に遇ったら、道をさえぎる神に対して、ささやかな品ものを手渡し、言葉をうまく述べて通してもらいなさい」という。踊りが終わると、ヤギを殺して解体する。解体されたヤギは、内臓はその夜のうちに食べ、肉は次の日に参列者に分ける。角は屋上の「ナシ」に供え、皮はヤギのもとの所有者にわたす。つぎに、遺体を墓地へ送り出す日には、遺体を運ぶ者たち、「ガタ」隊、親戚が順に列を作って墓地へ向かう。埋葬を終えた後、「シュ」は墓の周りをまわりながら「ガタ」を踊る。まわりながら「ガタ」を演じるのは、死者を欺きに来る「邪神」や「邪鬼」から死者の霊魂を守るためである。

「羌寨喪葬目撃記」によれば、1983 年 7 月 5 日、同郷永和村下寨で行われた 70 歳の女性の土葬で、「ガタ」はつぎのように行われた［四川省編輯組 1986：194-197］。参考資料として付す。

「ガタ」隊は、8 人の「シュ」と 8 人の「鎧兜」によって構成される。「鎧兜」はチャン語では「ガサ」とよび、漢語では「八大将軍」という。チャン族の守護神である。「ガタ」には 3 つの役割がある。葬儀をしきる、弔問客を整然と案内する、楽器の演奏や歌、踊りを演じることによって死者の霊を慰めることである。「ガタ」隊が一定数以上の人数でなければ、盛大な葬儀とはいえない。解放前の葬儀では、「鎧兜神」に扮する者は、皮製の帽子をかぶり、約 15 キロの牛皮製の鎧兜を身につけたが、解放後はどちらもつけず、先端が 3 本に分かれた「ザイヲ」とよぶ弓を手に持つだけである。先端の 3 本はそれぞれ「山頂神」「山腰樹林神」「山脚神」を表す。「シュ」に対する報酬は、かつては 1 人あたり「大洋」2 個と神に供えた穀物（トウモロコシ 2 升）、3 斤の［pis］であったが、人民共和国成立後は酒食でもてなす以外には「孝布」1 枚を送るだけである。葬儀の儀礼は死後 3 日目の午後から始まる。

弔問の親戚の出迎え　村の入り口で、「ガタ」隊は楽器を鳴らしながら葬家とともに弔問客を出迎える。弔問の到着と同時に礼炮を鳴らす。法冠と豹皮をつけた「シュ」が「巴郎鼓」や「響盤」を振り、「羊皮鼓」を打ちながら、「万字格」や「八陣」の歩調で踊り、客を迎える歌を唱う（約 30 分）。

弔問客が「ガタ」隊に導かれて葬家に到着。門口では、邪を払うために「シュ」が短剣を手に呪文を唱え、「ガサ」が歌う。歌の大意は、死者は生前、よく働いて家を治め、節約につとめ、子や孫を立派に育てた、それにもかかわらず門神将軍は家人を守るという職務を全うできずに家族を一人減らしてしまった、と。葬主は、客の一人ひとりに酒一杯をふるまう。全員が霊堂に入る。この時、「シュ」は法器を振りながら呪文を唱え、「万字格」と「八陣」を舞う。「ガサ」は楽器を打ち鳴らしながら「シュ」と交互に踊る。女性が声をあげて泣く。葬主が親戚に「孝帕」を配る。母方オジが棺に「孝衣」と「孝帕」をかける。

以後、親戚が到着するたびに同様のことが行われる。

神を招く儀式　同日の夕方、葬家の屋上では「ラシ」の前に祭壇が設置される。穀物2升と酒を杯に16杯、[pis] 3斤を供える。「ガサ」が祭壇の前で楽器を打ち振る中、「シュ」は招神の作法を行い、「万字格」「八陣」「蛇脱皮」の踊りを舞う。「ガサ」はさらに死者の生前の行いを称え、子孫を守りたまえと歌う。葬主が参席者一人ずつに酒1杯をふるまって、終了（約60分）。その後、葬家は宴席を設けて親戚、「ガタ隊」、友人などをもてなす。

「捍馬」の儀式　宴が終了後、「ガタ」隊は霊堂から台所へ行き、「捍馬」を行う。「涼粉」と豚の頭の肉、「豆腐干」をあらかじめ用意する。「豆腐干」は馬の肉を表す。伝説によれば、渭門のチャン族の祖先は松潘の草原から較場、畳渓を経て当地に定着した。そこで当地では、人が亡くなると松潘に馬を買いに行き、それに死者の霊魂を乗せて西方へ送り出さなければならない。「豆腐干」は松潘から馬を買ってきて殺し、死者に捧げたことを表す。

「ガサ」が歌によって、喪主と神との問答の仲介を行う。神に「松潘の草原に行って死者と葬家と母方の実家のために3頭の馬を買う」と告げ、喪主は跪いて「その通りに致します」と答える。再び「ガサ」が神に「買わなければならない馬が3頭もあって喪主はすべてを買うことができないので死者用の1頭だけで許していただきたい」と願う。「ガサ」は神になりかわって、許すことを告げる。最後に喪主が参列者に肉ひとかけらと酒一杯などを配る（約30分）。

道士が経文を読む。喪主は地面に跪いて紙銭を焼き、線香を燃やす。道士は墓地に持っていく「霊牌」と「魂幡」以外の供物を焼く。

埋葬と「転路」（招魂）の儀式　4日目のあけがた、「ガサ」隊の先導で葬家と親戚が遺体を墓地に運ぶ。棺桶の上に鶏を置く。当地では、ヤギを殺して「引用羊」にする風習はすでにみられない。墓地では、まず鶏血を墓穴の周囲に撒く。棺桶を墓穴に入れ、土を途中まで盛る。招魂の儀式を経て死者の魂が墓地にもどってくるのを待つことを意味する。

「ガサ」隊は法器や「巴郎鼓」を振り、「羊皮鼓」を打ち鳴らしながら、葬家と親戚を先導して墓地から「神木渓」へ向かう。「神木渓」は墓地の向かい側の山麓にあり、そこから村へ続く道はかつて祖先が移動してきた道である。招魂の儀式は「神木渓」でつぎのように行われる。葬家が神に酒、[pis]、トウモロコシを捧げ、線香をもやす。「シュ」は「巴郎鼓」を振り、「響盤」を鳴らし、「羊皮鼓」を打って踊る。「ガサ」は「死者の霊魂よ、祖先が移ってきた松潘、較場、畳渓を経る道をたどってもどり、墳山（墓地）へ向かえ」と歌う（約120分）。

墓地へもどり、埋葬の終了をつげる儀式を行う。今回は墓地ではなく、葬家の屋上で行われた。屋上の「ナヘシ」の前に [pis]、酒20杯、トウモロコシ2升を供え、線香をもやす。「ガサ」隊が登場。「ガサ」が楽器を打ち鳴らす中、「シュ」は神を敬う経文を読み、「万字格」「八陣」「蛇脱皮」などの踊りを舞う。「ガサ」は「死者の霊魂が喜んで旅たち、墳山

に永遠にとどまれ」と歌う（約30分）。

「シュ」が火をかかげて［pis］を焼き、葬家は［mumu］2個を参列者に配る。

葬家は「シュ」や「ガサ」、道士、陰陽先生（墓穴の位置を占う）、親戚、友人らを朝食に招く。食事後、葬儀の終了を告げる。

葬家は「ガサ」に頼んで、墓穴に土を盛ってもらう。以上で埋葬がすべて終了する。

註

1）各地に伝えられる「羌戈大戦」は、経文としては汶川県綿池の「ド」や雁門の「ピグニ」、理県桃坪の話などが「羌族宗教調査」［四川省編輯組 1986：136-138、161-166、180］に収められている。また民間伝承としては「乃爾都」「羌戈大戦的伝説」［四川阿壩州文化局 1988：18-22、31-33］や「羌戈大戦的伝説」［茂汶羌族自治県文化館編 1987］、理県佳山の話［馬長寿 1984：169-170］などがある。楊明主編『羌族文学史』［1994：82-91］には、文字については、「羌戈大戦与嘎爾都」に各地の伝説が収められ、解説が付せられている。

2）［冉光栄・李紹明・周錫銀 1985：247-255］によれば、チャン族地区では、明代以来の土司制度が清代に引き継がれ、茂県や汶川地区を中心に20余りの土司が設けられた。長寧安撫司蘇朝棟（324戸、沙壩）静州長官司懐徳（248戸）、隴木長官司何裳之（267戸）、岳希坤連（150戸）、水草巡検使蘇国光（120戸）、牟托巡検温清近（54戸）、大姓寨土百戸郁延棟（原籍湖広人、唐代に土百戸、黒水3寨122戸）などである。土司の勢力は、王朝側の軍屯制度が崩れ始めた明代中期以降、それに反比例して強まる。雑谷土司の場合、桑吉朋が康熙19年（1680）に職を受け、蒼旺が金川事変での功により乾隆14年（1749）に宣慰司を賜った。蒼旺は周辺土司の土地を侵略して勢力を増していったために、乾隆19年（1752）に四総督軍に滅ぼされた。「改土帰流」後は、南部は屯守備制度の下で雑谷、乾堡、上孟董、下孟董、九子の五屯が置かれ、理番庁の管轄となった。北部の十八寨は「里」に改められた。チャン族地区の「改土帰流」は雑谷土司の廃止以降すすみ、特に茂州の管轄下にあった地域のチャン族は「漢戸」に編入された。その結果、乾隆から道光までの100年あまりの間に汶川瓦寺土司以外のほとんどの土司が改流されたり、大幅に勢力をそがれて3～5寨を治める地主程度になった。チャン族地区への漢族の流入は、商人や屯田兵を中心に明末清初頃から盛んとなり、進んだ生産技術や鉄製農具などの生産工具を民族地区へもたらした。

3）「哥老会」は「袍哥」ともいう。北川県では清末に始まって民国時代に盛んに行われ1950年代の暴動で鎮圧されて消失した。各「碼頭」（「社」）に21の「堂口」があり、「堂口」の組織は「堂大爺」（「舵把子」）、「銭粮三爺」（「三排」）、「管事五爺」（「五排」）、「帮辨六爺」（「六排」）、「巡風九爺」（「九排」）、「小老幺」（「幺排」）の役職と「跑腿」「送信」「支差」等から構成された。毎年三回の例会があり、5月13日の「単刀会」と12月下旬の「団拝会」では新会員の参会手続き、賞罰の処理、もめ事の調停等が行われ、7月13日の「中元会」では物故会員の「超度亡魂」を行った。各「碼頭」の「大爺」は主に土地の有力者や地主であったため、官吏や軍隊、土匪と通じて専横し、片口場でのアヘンの取引や運搬をしきって巨利を得た。李・喬・曾・朱・周・楊・呉・張の姓の「大爺」を諷刺して県内では「治城的理構不得、漁坪的橋過不得、曲山的曾搬不得、擂鼓的猪殺不得、通口的舟坐不得、陳家壩的羊牽不得、小壩的屋進不得、片口的張開不得」と語られた［北川県志編纂委員会編 1996：719］。

茂県では茂県碼頭が清代光緒30年（1904）に始まり、民国元年（1912）には灌県の「西華公社」とつながって「西華公社」に改められた。「江防軍」や「川軍第三師第八混成旅」のトップ

はアヘン商人と結んで実権を握り、「茶館」を開いて集会所を兼ねた［四川省阿壩藏族羌族自治州茂汶羌族自治県地方志編纂委員会編 1997：710-711］。

汶川県では清代宣統年間（1909～1911）に灌県の「西華公社」とつながる「西昌公社」が設立された。汶川の「跑哥」は1911年の辛亥革命の時に漩口の姚宝珊や三江口の瓦寺土寺索代庚を首領とする西路同士軍第五路軍に参軍して革命のために戦った。しかし1920年代以降はアヘン交易や賭ばく等の「黒社会」を形成したため、人民共和国成立後に一掃された。組織は「座堂大」「聖賢二」「当家三」「子龍四」「管事五」「巡風六」「羅成七、八、九、十」「老幺」の役職からなり、「仁」をスローガンとする。賭博場や茶館、烟館（アヘン館）を経営し、アヘン商人の往来の保衛隊となって「交割」（保衛費）をとった。毎年5月13日と9月13日に例会を開き、9月13日には関帝廟で関羽を祀る「単刀会」を行った［四川省阿壩藏族羌族自治州汶川県地方志編纂委員会編 1992：771］。

4）茂汶羌族自治県は、全国で唯一のチャン族の自治県である。明代は茂州と称せられ、清代雍正5年（1727）に直隷州となった。民国2年（1913）に茂県に改められ、1927年には「四川省松理懋茂汶屯殖督辦署」が置かれた。1935年5月30日から7月22日まで紅軍は「中華蘇維埃共和国川陝省茂県蘇維埃政府」を樹立した。しかし1935年末から再び国民党治政下に入り、現在の阿壩州に相当する地域を管轄する四川省第十六行政督察区専員公署が設置された。1950年1月、茂県は共産党によって「解放」され、1958年7月7日、茂県、汶川県、理県が合併して茂汶羌族自治県が成立した。さらに1963年には汶州県と理県がそれぞれ独立し、人民政府の所在地も威州鎮から鳳儀鎮に移されて、現在に至る。行政区分では5区と1鎮22郷からなる。

茂汶羌族自治県は、岷江上流域の東経102.56～104.10度、北緯31.24～32.17度に位置し、東西が117キロ、南北が96キロで、総面積は4000平方キロメートルある。海抜高度は最低が土門の910メートル、最高が龍門山脈九頂山の4984メートルと邛崍山脈万年雪峰の5230メートルであるが、集落や耕地の大部分は2000～3000メートルの山腹斜面にある。年間の平均気温は11度で、最低は零下12度、最高は32度、無霜期間は年に220日、年間平均降水量は490ミリで、5月から10月の間に集中する。雨量が少ない上に蒸発量がその約3倍であるために乾燥しており、昼夜の温度差が大きい［茂汶羌族自治県概況編写組 1985：1-3］。

5）行政的には、四川省阿壩藏族羌族自治州・甘孜藏族自治州・涼山彝族自治州、雲南省迪慶藏族自治州・怒江傈僳族自治州などを含む四川盆地西部地域である。

6）中国では、地形は海抜高度により次のように区分されるのが一般的である。500メートル未満平原、500～999メートル 盆地、1000～1999メートル 丘陵、2000～4999メートル高原、5000メートル以上山地。しかし、上記の分類のうち、山地と丘陵に関しては以下の条件すなわち海

名　　称		絶対高度（m）	相対高度（m）
極　高　山		＞5,000	＞1,000
高　山	強烈な開析	3,500～5,000	＞1,000
	中等の開析		500～1,000
	軽微な開析		100～500
中　山	強烈な開析	1,000～3,500	＞1,000
	中等の開析		500～1,000
	軽微な開析		100～500
低　山	中等の開析	500～1,000	500～1,000
	軽微な開析		100～500
丘　陵		＜500	＜200

面からの絶対高度と相対高度の組み合わせも考慮する必要がある。そのため、区分は複雑なものとなる。

［衛傑文他編、河野通博・青木千枝子訳『現代中国地誌』古今書院 1988：16］

7）木内信蔵『世界地理2　東アジア』朝倉書店 1984：298。

8）前掲7）9頁。

9）わが国では一般に「生育期間」と称している。「生育期間」とは、多くの植物では日平均気温が5度以下になると生産機能を停止するため、この温度以上の期間をいう。別名「植物期間」とも称せられている。なお、わが国では、吉良龍夫が考案した「暖かさの指数」（温量指数）が「生育期間」を示すものとしてよく使用されている。「暖かさの指数」は、ある土地の1年各月のうち、月平均気温（t）が摂氏5度以上の月が i 月あるとすれば、i（$t-5$）で求めることができる［福井英一郎編『新地理学講座・第4巻　自然地理Ⅱ』朝倉書店 1953：258-263］。

10）［四川省編輯組 1986：11］に記す1950年代の古老の記憶によれば、かつてチャン族地区ではチンクー麦やソバ、コムギを主に栽培し、エンバクや油菜も少々作っていた。チンクー麦もコムギも畝あたりの生産高が数十から百斤くらいしかなく、ソバやエンバクはもっと少なかった。トウモロコシが導入されてはじめて当地では自給が可能になった、ジャガイモは現品種の「王洋芋」がトウモロコシに少し遅れて導入された。以前には生産量の劣る「小洋芋」という品種があり、薛白峨布寨では30～40年前まで旧品種を栽培していた。伝説によれば、光緒初年（1875）、袁玉龍という武官がこの一帯の少数民族を討伐中に敵軍に山中に囲まれて糧食を断たれた時、これを見つけて根の部分が美味であることを知り、持ち帰って広めた。渭門郷羅卜寨では、もともと「鶏某洋芋」（「六月洋芋」）という品種があったが、民国初年に西から「王洋芋」が入ってきた。さらに民国10年をすぎて「二紅洋芋」が索谷坪から伝えられた。清末民初には河谷地区と山腹地区ではトウモロコシが普及していた。一等地ではトウモロコシと黄豆、二等地はジャガイモと莜麦、焼畑地ではソバと雑豆を栽培した。茂県県城以北では1940年代までチンクー麦が主作物であった。筆者の聞き取りによれば、3000メートルを超える高山地区では現在でもトウモロコシの栽培ができず、食糧の自給ができない地域がある。しかし1980年代以降に生産責任制が導入されて、サンショウなどの経済作物の生産にいちはやく成功した地域では現金収入が増え、購入した飯米を主食にするところが増えている。購入の方法は現金であったり、ジャガイモやトウモロコシを飯米と交換する。茂県赤不蘇区では、筆者が初めて訪れた1989年頃は米食はまだごちそうという感じであったが、1993年に再訪した時はかなりの家庭で日に一度は食するようになっていた。

11）チャン族地区でアヘン用のケシ栽培が始まったのは、19世紀末、清代光緒年間（1875～1908）である。アヘンは「洋薬」と改名され、一般の作物よりはるかに高い収入をもたらしたため（当時でコムギの3倍以上の利益があった）、地味の良い土地から食糧生産に替わって広く栽培されるようになった。やがて茂州、威州、雑谷脳などはアヘン交易の重要な拠点となり、1911年（宣統3年）、地方政府は茂州に「官膏店」を開いてアヘン専売にのりだし、茂州は「小成都」とよばれるほどにぎわった。しかしケシ栽培による弊害は大きかった。ケシ栽培の増加によって食糧生産のための耕地が激減し、大量の食糧を外地から購入せざるをえなくなった。また、人々がアヘンを治癒や客のもてなしに使い、日常生活でも吸うようになったために、成人は労働能力を喪失し、生活に困窮したり、破産するものが多出した。また地方の上層階級はアヘンの売買の利益で武器を購入し武装し始めた。そのため民国20年（1931）、「四川省松理懋茂汶屯殖督辦署」は各県屯に「禁烟督察処」を設置して禁種、禁運、禁吸をはかり、一方でケシ栽培に重税をかけた。が、それは表向きであり、当時の軍閥や地方政府の役人は、地方の豪紳や各地の哥老会の幹部、「烟幇」（アヘン運搬業者）と結託して莫大な地益を得ていた。［冉光栄・李紹

明・周錫銀 1985：278-282］［四川省編輯組 1986：6］［鄧錫侯輯 1936：92-96］参照。

12）サンショウは、清代の光緒年間に「茂州椒」として成都方面に出荷されていた［四川省編輯組 1986：5］。［東亜同文会支那省別全誌刊行会 1941：398-400］によれば、茂県は、四川省のサンショウの特産地である。サンショウは風に強く、耐寒性があるために茂県の土地や気候に適しており当時の茂県の年間生産額は1500石を超えた。しかし栽培や収穫、製造は手間がかかったため、かなりの人力と財力を要した。例えば100擔（1擔は約50キロ）のサンショウを収穫するのに労働者を毎日50〜60名雇って10余日かかった。一人の労働者は日に15〜16斤採取して5000〜6000文の工賃をえた。利益も多かったために、民国23年（1934）に政府が公地を売り出した時には県城周辺の荒地までも一般財産家がきそって買い、栽培を始めた。販路は東と南の2ルートがあり、東路は安県、北川、綿陽の商人が茂県にきて買収し、涪江流域の各県に転売した。南路は崇寧県、彭県、灌県一帯の商人が買い付け、灌県あるいは川東一帯に販売した。貿易額は年間10余万元に達した［邊政設訂委員会編 1940b：35-36］。

13）［邊政設訂委員会編 1940a：2］に引く『屯政紀要』によれば、懋県（現在の金川県）・理県・茂県など第16区の屯区一帯は、「石炭紀之岩層、所在皆是、花崗岩尤為普遍平谷之間、概係沙土礫土、高地不無粘土、但属偶見耳、又因破岩砕石、散布殆遍、至石多土寡、世称九石一土」とある。

14）1950年代前半までのチャン族の副業についてはつぎのようである［四川省編輯組 1986：12］。チャン族地区の農村の副業には2種類ある。一つは家庭で行うもので、麻布や毛織物（ヤギ毛を使用した敷物）を織る、ソーダや硝石を煮詰めるなどである。いま一つは出稼ぎで薪を刈って町へ売りにいく、漢方薬材を山中に採取にいってそれを売る、狩猟、荷担ぎ、石工として家屋の建築を手伝う、成都盆地に井戸掘りに行く、などである。毎年10、11、12月の農閑期に出かける。副業の目的は食糧の不足分を購入する、日常生活の必需品や住民間の交際費用、冠婚葬祭用の費用に備えるなどである。薛城区蒲渓郷色爾寨、奎寨では、清末の主な副業は富者にかわって穀物を雑谷脳や薛城などの地方都市に運んで売ることで、日当は120〜240文であった。そのほかソーダ石を草で燃やし煮詰めることで、男性は山中で毎年5月から10月まで働いて400〜500斤のソーダを作った。また［邊政設訂委員会編 1940b：53］に引く「民国25年十六区専員公署茂県概況表」によれば、全戸8283戸のうち自作農および半自作農は85パーセント、小作農および雇農は25パーセントで、副業の内容については、肉体労働者が全体の52パーセントを占めた。

15）『後漢書』巻百十西南夷列伝には「土気多寒盛夏氷猶不釋、故夷人冬則避寒入蜀為傭、夏則違暑返其邑」とある。任乃強『華陽国志校補圖注』［上海古籍出版社 1987：188-189］の「夷人冬則避寒入蜀、庸賃自食、夏則違暑反落、歳以為常」（『蜀志』汶山郡）の注に「茂汶羌民、直至清末民初、猶多有男女結隊入成都平原及川北各地売薬、打井、及俑力者」とある。［南ゆかり 1992：99］によれば、都江堰（成都から約50キロ西北に位置する大灌漑施設）歳修は各県ごとに労役人夫割当制であったのが、清代の康熙48年（1709）に人夫一人につき銀1両を供出する「折納銀制」になり、雇われた「蛮夫」の中にチャン族がいたという。清末民国期については［四川省編輯組 1986：12］参照。

16）「貝母」は、「あみがさゆり」ともいう。花は黄色で、球茎が白色あるいは黄色。球茎の白い澱粉性の粉が熱病や咳、出血、乳不足、リウマチ、眼病に処方される。「大黄」は野生物と栽培物の区別があるが、当地のは「涼黄」といい、野生である。大根状に肥大した下部（根）を消化剤または消化器に対する強壮剤として処方する。「虫草」は、「冬虫夏草」ともいい、山草類の一種である。冬は三寸余りの虫になり、夏は韮葉に似た草になる。冬に虫となったものを処方し、肺病や腎臓病、強壮剤とする。萬病に効く。「羌活」は「ししうど」「独活」ともいう。

刺戟剤や関節炎薬、鎮症薬に処方される［東亜同文会支那省別全誌刊行会 1941b：442-443、388-398、407］。

17) ヤギは、「祭山会」では神への捧げ物であり、葬式では死者の魂を故地へ導く。治病の儀式でヤギを犠牲とすることは病の原因となる「鬼」をヤギに移して殺し、それをおいはらったことを意味する。邪悪なものをはらう儀式においてヤギを犠牲にするのは、ヤギがチャン族から文字を奪った罪ほろぼしであるとも語られている。またかつて茂県赤不蘇区では婚約の時に男性側から女性側へ雌のヤギを贈った。チャン族にとってのヤギは、従来聖なる「トーテム」として語られてきたが、実生活では、財産としての価値と儀礼時の犠牲獣としての意味が大きい。

18)「吊狗祭山」は茂県土門一帯でかつて行われていた。住民は正月あるいは夏の祭山会のために一升のトウモロコシをだして白犬を買い、「郷約」（寨首）が育てた。祭山会ではまず「シュ」が山頂の白石の前でコノテガシワの枝を燃やし、スギの枝を白石の台にさし、羊皮鼓を打って、天に吉祥を祈る経文を唱える。白犬に食物を与えてカゴに入れ、縄で神樹林の「吊狗樹」につるす。7 日後、白犬がまだ生きていたらその一年は「吉」であるが、死んでしまったらひどい災害にみまわれるとされた。鶏を犠牲にするのは端午祭の時の祭山会で、茂県の一部の地域で行う。茂県赤不蘇ではオスの「犏牛」を 5 月の祭山会で犠牲にした［四川省阿壩藏族羌族自治州茂汶羌族自治県地方志編纂委員会編 1997：706-707］。

19) 伝えるところでは、古代羌には一年を 10 ヵ月とする「羌年」があったが、秦漢の頃から漢族の影響を受けて一年を 12 ヵ月とする農暦を行うようになった。農暦 10 月 1 日の「羌暦年」はチャン族の正月であり、ソバ粉で半月型に作って蒸した、肉入りの「瓦達」を一家で食べ、小麦粉で作った牛やヤギ、鶏、馬を祖先や天神に供えた。また「咂酒」を飲んで［pis］を食べ、「沙朗」を踊り、集落単位で山頂の白石の前で牛やヤギを犠牲にして神を祀った。明清以降は、漢族の春節も行うようになった。1987 年に阿壩藏族羌族自治州となった時に、州の人民政府は「羌暦年」を祝日と制定し、1988 年に茂県鳳儀鎮で第一回羌暦年慶祝会が汶川県、理県、茂県、北川県合同で開催された［四川省阿壩藏族羌族自治州茂汶羌族自治県地方志編纂委員会編 1997：667］。

20) 理県ではかつて 6 月 24 日に川主神の李冰父子を祀った。川主会を最も盛んに行った桃坪郷では、集落の各戸が一斗のトウモロコシを供出し、咂酒を飲み、「鍋庄」を踊った［四川省理県志編纂委員会編 1997：770］。汶川県では 6 月 24 日に漩口、三江、雁門の各郷で［四川省阿壩藏族羌族自治州汶川県地方志編纂委員会編 1992：797］、北川県では 6 月 20 日に実施した［北川県志編纂委員会編 1996：731］。

21) 人民共和国成立以前、汶川県では新暦 2 月上旬の 5、6 日に政府主催で「迎春典礼」（「打春」）を行った。「春官」に扮した県官を先頭に紙製の「春牛」と紙製の春の花を手にした農民達が列をなして「春場壩」に行き、各地の「シュ」が羊皮鼓を打ち、「春官」が春を唱った後、「芒神」を皆で追う。「芒神」を捉え「春牛」を斬った後、「シュ」が鼓を打って穢れをはらい、「春官」が「春牛年表」を各戸に配った［四川省阿壩藏族羌族自治州汶川県地方志編纂委員会編 1992：797］。

22) 1991 年 9 月、現地での聞き取りによれば、黒水県維古区石碉楼郷俄爾村では 6 月 22 日から 3 日間、近隣の苦瓜村、格衣村、瓦洛村、卡地村、木須村の六村で「座山会」を行う。一日目は各村単位でする。俄爾村では、村の山神「可的可楽叭」のいます山に全住民が新しい服を着て、煮た豚の頭や乾燥肉、［mumu］と酒を持って登る。男性のみが山頂の塔まで行くことを許される。男性は一人ずつ［mumu］をつけた麦杆や棒をさす。コノテガシワの枝を燃やし、老人が「麻人格勒」経を読む。山腹の草場で住民は年齢によってグループに分かれて共食し、歌い、踊り、競馬をする、23 日は家でごちそうを食べて休息、24 日は 6 村の住民が草場に集まり、6 村から

それぞれ最高齢の者が選ばれ、最古の苦瓜村から順に話をする。酒をくみ交し、6 村の和睦を祈る。踊って歌い、共食する。

23) かつて理県雑谷脳では、旱害時には「捜山」の儀式を行った。山で薬草を採取したり、獣をとることを禁止し、それに違反したものを捜しだして血が流れるまで殴る。狩の神「叉叉神」は殺生をきらうと信じられていたからである。「捜山」の後、曲星上下三寨では「木刻」を聖山の山洞にかくし、その半分をもち返り、さらに既婚女性に残りを取りにいかせた。女性達は山洞の神前で泣き、大小便をし、卑猥な歌を唱って、山洞内の清水を村に持ち帰った［胡鑑民 1941・1990 再刊：210］。

24)「シュ」は術を行う時は、法器として、頭部に神像を付けた鉄製の「神杖」や銅製の「法鈴」、獣の角などを持ち、頭には「猴皮帽」をかぶる。チャン族は病気や貧困、災害などあらゆる災害はすべて「鬼」（［duɹ］あるいは［χluʂ］）がひきおこすものと考えたため、災難や不幸にあったら必ず「シュ」にその「鬼」をおいはらう術をしてもらった。治病の最も一般的な術ではヤギを犠牲にする。ワラで人型を作って病人の服を着せ、墓地でワラ人形を焼き、ヤギを殺す。これはワラ人形が「病魔」をヤギに乗せて連れ去ったことを意味する。さらに「シュ」は病人の魂をよび（「喊魂」）、地面においた紙の中に入ってきた小さな虫をカゴに入れて病人の家に持ち帰る。この時の虫は病人の魂を表す。このほかまっかに焼いた鍋やクワの上を飛ぶように歩く術も行った［胡鑑民 1941・1990 再刊：204-205］。

第２章　蒲渓チャン族郷蒲渓村の形成と運営

はじめに

本章の目的は、チャン族集落の形成と運営、およびその特質を、理県蒲渓チャン族郷の蒲渓村を事例に、宗族組織や婚戚との関連、「村規民約」などの習慣法から明らかにするものである。チャン族社会は、一般に、父系の親族集団を骨格として構成されている［徐平 1993］。よって集落の形成や運営は、各父系親族集団の発展過程や婚戚の形成、それらの相互関係と密接に関連していると考えられる。

事例とした蒲渓村は、平均海抜高度が 2000～3000 メートルの山腹に位置し、外部からの襲撃に対して防御上に優れた、チャン族の典型的な山砦型の村である。また 2001 年に麓からの自動車道が開通するまでは外部とは半ば隔絶された状況にあって、伝統的な習慣が根強く残された地域として知られている。

１．地域の概要

（１）　理県の概略

理県は、青海チベット高原東南端の峡谷地帯に位置する。全県の平均海抜高度は、河谷がおよそ 1500 メートル、集落の点在する山腹が 2000～3000 メートル、山頂付近は 4000～5000 メートルに達する。周辺を 4000 メートル級の山脈に囲まれ、北には岷山山脈に続く瓦鉢梁子山脈、東には標高 4969 メートルの九頂山を擁する茶坪山脈、西には邛崍山脈が連なる。南の汶川県との境はパンダが棲息する臥龍自然保護区である。また県の中央部を邛崍山脈に源を発する雑谷脳河が南北に流れ、県城付近から向きを東西に変えて岷江に注ぎ込む。土地は灰白色の花崗岩を含んだ岩層からなり、礫土が多い。いわゆる「九石一土」の土地である。

気候は、年間を通じて冷涼で乾燥している。全県の年間平均気温は 6.2 度、最低気温は－16.0 度で、最高気温は 30.0 度に達する。年間降水量は約 360 ミリで、夏季に 70 パーセント弱が集中する。10 月に霜が降り始めて、11 月に雪に変わる。雪どけは 2 月頃から始まる。無霜期間は年間 200 日前後で、農作物の収穫は一年に 1 回である。

植生は、3000 メートル以下は針葉樹・広葉樹の混交林帯で冷杉・雲杉・鉄杉・樺木・椴木・漆樹などが茂る。3000～4000 メートルの間は針葉樹林帯で冷杉・雲杉の原生林、4000 メートル以上は高山灌木草原地帯である。理県は森林資源が豊富なうえに大消費地の成都に近かったことから、1930 年代から漢族が雑谷脳や威州に伐採場を作り、木材の切出しと

河川を利用した運搬を始めた。毎年、1000 人を超える漢族がこのために内地から出稼ぎにきた[1)]。しかし 1954 年に成阿公路が開通すると、運輸の主流はトラックになり、1980 年代後半からは、個人がトラックを所有して運輸業に専従する例が増加している。

周辺の高山部は、また「冬虫夏草」「貝母」「羌活」などの漢方薬材の産地としても知られている。すでに民国初期に「盛興号」「協盛全」などと号する大都市の薬材問屋が仲買人を城鎮に派遣して、盛んに漢方薬材を取引した。最盛期には川北の安岳県や楽至県などから年間数千人の出稼ぎ漢族が採取人夫としてやってきたという[2)]。漢方薬材の採集は、現在も地元のギャロン・チベット族の重要な収入源である。

県の総人口は 1991 年の統計では約 4.2 万人で、阿壩自治州内の 12 県の中では牧畜地区の紅原や壌塘の約 3 万人についで規模が小さい。人口はこの 40 年あまりの間に倍増しているが、1985 年からはほとんど横ばいである。総人口の約 83 パーセントを占める農村部は微増であるが、地方都市の人口が少しずつ減少している。このような人口の減少傾向は、交通の要衝として人口増加が続く汶川や茂県、阿壩以外の 9 県にほぼ共通してみられる。

民族構成は、ギャロン・チベット族が 19181 人で全体の 45.7 パーセントを占め、次のチャン族が 12961 人で 30.9 パーセント、漢族が 10064 人で 24.0 パーセント、ほかに少数の回族が居住する（1990）。1953 年と比べると、ギャロン・チベット族は 2.2 倍、チャン族は 1.7 倍、漢族は 1.5 倍に増加している（図 15）。ギャロン・チベット族やチャン族の増加率が漢族より高いのは、1980 年代以降に推進された一人っ子政策が少数民族には 2 人まで認められたこと、特にギャロン・チベット族の場合は、金川県と同様に漢族からギャロン・チベット族への民族改正があったのではないかと推測される。

これらの民族間では、民族別の住みわけがはっきりしている。薛城を境に西側には主にギャロン・チベット族、東側にはチャン族、街道沿いの町や城内に漢族や回族が集住している。行政区分によれば（1985 年）、理県は県政府所在地である雑谷脳鎮と米亜羅鎮、薛城・通化・雑谷脳・米亜羅の 4 区から構成されており、区の下位には 11 の郷がある。このうちチャン族は、薛城・蒲渓（以上薛城区）・通化・桃坪・木卡（以上通化区）に居住し、ギャロン・チベット族は、上孟・下孟（以上薛城区）・甘堡・興隆・朴頭（以上雑谷脳区）・沙壩・夾壁・米亜羅（以上米亜羅区）に集中する。

歴史を溯れば、理県は、元来、ギャロン・チベット族やチャン族が定住する地域であった。『阿壩藏族自治州概況』などの文献史料によれば[3)]、ギャロン・チベット族は古代「氐羌」から発展した「西山諸羌」の最大部落「哥邻羌」を祖先とし、唐代には吐蕃に征服されて「チベット化」した。明代には土司の下で中国王朝の間接支配を受けたものの、実質的には独立国であったために勢力を伸ばし、それを危惧した清朝によって乾隆 17 年(1753)に雑谷土司が制圧され、直接支配の「四土五屯」制にかわった。

漢族の進出は、この時期を境に始まった。清朝は屯区に大量の漢族移民を送り込む一方

で、「里甲制」「団甲制」をしき、さらに民国初期には「松理懋汶屯殖区」、1935年には「第十六行世督察区」に入れられた。漢族は、このような中国王朝の政治的支配の下で雑谷脳鎮を中心に次第にその数を増やし、1953年の統計では、興隆郷の総人口4653人の59パーセントを漢族が占めるに至った（1953）。また漢族は集団で移住するばかりでなく、季節的な出稼ぎ者としても来村し、そのまま現地のギャロン・チベット族の家に婿入りしてチベット族になった者も少なくなかった。

県の経済状況については、1991年の統計では、農民1人あたりの年収は約888.9元で、四川の民族地域のなかで最も高い阿壩州馬爾康の915.3元についで富裕である。ただしこのように豊かになったのは生産請負制が導入された1980年代以降のことで、しかもその変化は主に交通の便の良い河谷地区に限られていた。例えば薛城郷の河谷地区では、気候がリンゴやサンショウ、白菜などの経済作物の栽培に適していたうえに大消費地の成都に比較的近く、気候が成都よりひと月遅れであることから出荷時期をずらすことが可能で、収入増につながった。しかし集落の多数が点在する山腹地区では、冷涼な気候が経済作物の栽培に不適で交通の便も悪いことから、経済作物の導入が難しく、農業生産は自給用にとどまっている村も少なくない。

（2）　蒲渓郷蒲渓村の概況

蒲渓郷は、四川省の省都、成都から西北へ200キロ、県城（県人民政府所在地）の雑谷脳鎮からは東へ約19キロの山間部に位置する。チャン族の居住地としては最も西にある。2001年の統計によれば、総戸数は372戸、総人口は1848人で、ほぼ全員がチャン族である。現行の行政区分では薛城区に属し、郷内は蒲渓・色爾・圭寨・休渓・河壩の5行政村に分かれる（図16）。このうち蒲渓村には最も古い集落が含まれており、蒲渓の名称はその集落名に由来する。

ただし従来の地域的概念では、蒲渓郷は現行の行政区分よりやや広い「蒲渓十寨」とよばれる地域に属する[4]。それは蒲渓郷内の5つの行政村（蒲渓後寨）と、小岐・大岐・馬山・建山（以上薛城郷）・朱耳（木卡郷）の5つの行政村（蒲渓前寨）からなる。民国時代の『理番概況』によれば、理番県には当時の行政区分とは異なる四土・五屯・六里・九梏・十寨などの旧地名が通用されており、それぞれには共通した特徴がみられる。例えば蒲渓十寨ではチャン語北部方言の黒水語に似た固有の方言が使用され、常にヤギ皮の黒いベストと長着を身に着けていたこと、また政治的には早くから中央政府に帰順し、民国時代は県政府の直轄下にあったことなどが記されている。すなわち「蒲渓十寨」とは、旧地名であると同時に、言語や服飾などにおいて共通する要素をもつ下位区分の文化圏であるともいえる。また後述するように、蒲渓村の婚姻はほとんどこの蒲渓十寨内であり、よって日常のつきあいもほぼこの範囲内で行われている。

ところで蒲渓郷は、理県の中でも経済的にやや遅れた地域とみなされてきた。それは、

第1に、険しい峡谷の斜面に開かれた耕地が人口に対して絶対的に不足していたことによる。例えば1950年代の統計によれば、チャン族の居住する各郷の1人あたりの耕地は、薛城郷が4.20畝（1畝は6.67アール）、通化郷が7.7畝、桃坪郷が5.1畝であるのに対して、蒲渓郷は1.58畝にすぎなかった。蒲渓郷はかつては「3月緊緊、4月半半、5月莫法」と語られて、毎年3ヵ月の食料が常に不足していたという。第2には、交通の不便さがある。蒲渓郷の集落は、防衛上の理由から2000メートルを越える山地の斜面に形成されており、最も近い地方都市の雑谷脳鎮や薛城鎮へ往復するのに徒歩では2日、灌県までは徒歩で約10日を要した。そのため外地へ薪や漢方薬材を売りに行ったり、臨時の農作業をして現金収入を得ることが容易ではなかった。

しかしこの状況も大きく変化している。まず1954年には成都と阿壩を結ぶ成阿公路が開通し、蒲渓溝と雑谷脳河の合流点にある郷の入り口までは公路のバスが利用できるようになった。1956年には入り口から麓の河壩村までの約4キロの区間にトラック1台が通れるほどの幅の道路が作られ、1983年に生産請負制が導入されてからは、河壩村は成都などの都市向けにリンゴやサンショウ、白菜を栽培して急速に現金収入が増えてきた。これに対して山腹に位置する集落ではつい最近まで交通の不便さは従来とかわりなく、河壩村との経済的格差は大きくなるばかりであった。しかし2002年に国家級「貧困郷」に指定されて100万元の援助金が投資され、麓の郷人民政府所在地である河壩村と山腹の4村を結ぶ自動車道路や高圧電気の配置などのインフラ整備が進められ、山腹の集落にもようやく発展の糸口が見えかかっている。

蒲渓村は、かつては郷内では最も広くて肥沃な耕地にめぐまれ、人口も最多の村であった。2001年の統計では、総戸数117戸、総人口593人で、全員がチャン族である。村内には、麓に近い方から順に半坡寨、下寨と上寨（あわせて大蒲渓という）、大寨、小火地寨の5集落がある（図16）。2001年に大蒲渓まで自動車道が開通するまで各集落をつなぐのは1メートル弱の山道だけであり、麓の河壩村から山頂付近の小火地までは、約1300メートルの高度差があるために地元の人の足でも3～4時間を要した。

各集落の概要はつぎのようである。麓の河壩村を出て急傾斜の山道を約15分上ると、目の前に戸数29戸、人口136人の半坡寨が見えてくる。高度は約2100メートル、家屋が畑の中に数軒ずつ点在し、集落から少しはずれた一段高い所には最近修復された廟がみえる。また廟の反対側の集落はずれには、嘉慶年号（1796～1820）を刻んだ余家の墓碑が残っている。余家は挙人をだした家柄で、民国時代初期にこの一帯に勢力をふるった。斜面には全面にトウモロコシ畑が広がっており、ところどころにサンショウの木が栽培されている。近年、チャン族地区で奨励されているサンショウは、高度2200メートルのちょうどこのあたりが栽培高度の限界であり、この高度を超える集落で栽培されたサンショウは品質や数量、価格がかなり劣っている。

半坡寨を過ぎ、対岸の山腹に色爾村をみながらさらにつづら折れの山道を1時間半ほど上ると、砦のように集まって聳えた石造家屋群が現れる。大蒲渓である。大蒲渓は行政上では上寨と下寨に二分されているが、廟を共有し、祭りなどの集団的な活動も一緒に行う。伝えるところでは、ここは蒲渓溝一帯の中では土地が最も肥沃であったために人々が最初に定住したという。戸数は59戸、人口は281人で、そのうち上寨が30戸・143人、下寨が29戸・138人である。村内では最も人口が多い。

大蒲渓の概観は典型的なチャン族集落のそれである（図17）。高度2600メートル前後の緩やかな山腹斜面に、居住部分を中心として周辺に畑がひろがり、背後には集落の神山が位置する。居住部分は、細かい石を積み上げた平屋根3階建ての家屋がおり重なるように建ち並び、その間を幅1メートルほどの小路が縦横に走っている。また隣接した家屋の間は屋根伝いに往来する。

集落内には、上寨と下寨のほぼ中間の山側に小学校がある。かつて廟のあった所である。1950年代の半ばまで、この廟には「バリュヘゼチ（神山バリュジュケの神）」や「アブザジョセ（寨神）」、玉皇大帝や青苗土地神などの神々が祀られており、「ルマジ」や「ガル」の祭りが行われた。廟が小学校の裏手にようやく修復されたのは1994年の春である。また同年2月には、およそ40年ぶりに「ガル」の祭りも再開された。大蒲渓の「ガル」は、もともと村内の5集落の住民が参加して行われてきたもので、外部の者の参加は許されない。また当日は、ここでのみ演じられる、蒲渓村の歴史を語る演目が出された。

大蒲渓の小学校は、人民共和国成立直後の1950年に開校した。民辦教師[5]である楊樹文（52歳・男性）によれば、解放前には、外部から漢族の教師を招いて開いた私塾があり、学生は半年ごとに約80斤の穀物を教師にはらって「千字文」などを習った。楊樹文は1949年に私塾で1年間学び、解放後、大蒲渓小学校に4年、薛城の小学校に2年、さらに理県県城の中学にすすんで1963年から教師をしている。1993年、蒲渓村小学校には1年生から4年生まで約60名の学生と3人の教師がいた。学生の就学率は100パーセントである。2学期制で、学費は1学期20元である。4年生終了時に成績の良い者は、さらに麓の河壩村にある蒲渓郷小学校に入る。教師はみなチャン族で、公辦が1名と民辦が1名、月収は前者が300元、後者が97元である（2001年の聞き取りでは前者の月給は約800元）。

また集落の周縁には、2ヵ所の湧水（水源）と3ヵ所の火葬場（「火墳」）がある。水源は、もともと上寨側と下寨側のはずれに1ヵ所ずつあり、住民はどちらも自由に使用した。かつては日に2回、水桶を背負って水汲みに行くのが女性の重要な仕事であった。ところが下寨側が次第に涸れ始めたために、1986年には山側の湧き水から水道管を引いて集落の入り口付近に共同水道場が作られた。水汲みは男性も行い、道具も水桶から天秤棒にさげた2つのバケツになった。しかし2001年に麓からの車道が通じてからは、共同水場は駐車場にかわり、水道は各戸に引かれている。

火葬場は、韓姓・王姓（王Ａと王Ｂ）のが合わせて３ヵ所ある。チャン族の火葬場は、同一の祖先をもつ父系集団がそれぞれ専有するものであり、原則として他姓の者の使用は許さない。また彼らは火葬後そのまま骨灰をその場に埋めてしまうために、それは一族共有の墓でもあり、ある場所に定住を決めた時に必ず定める一族の象徴でもある。

さらに集落の背後には、彼らに様々な恵みを与えてきた山がある。山の樹木や植物は日常生活に不可欠な燃料や堆肥、家屋の資材を供給しており、高山部は「貝母」「羌活」「虫草」などの漢方薬材の宝庫として彼らの貴重な現金収入源となっている。また集落から徒歩で１時間余の海抜4500メートルの山頂の草地は、蒲渓、色爾、河壩の３村の共同牧場として利用されている。このように周辺の山々は、村内の住民にとって大切な共有財産であり、各村に所属する山は、尾根や溝を境界として古くから厳密に意識されてきた。そのため各集落の住民以外の自由な使用は厳しく禁じられており、違反した者は捕えられ、集落の慣習に従って相手方に酒をふるまうことで罪を償った。現在でも外部の者が自由に草や薪を採集することは慣習として許されていない。なお1983年以降は政府が森林資源保護のために乱伐を禁止したために、地元住民が家屋建築用の木材を切り出す場合にも郷政府の許可と一定の金銭の支払いが必要となった[6]。

また山は、チャン族にとっては信仰の対象でもある。理県や汶川のチャン族は、県境に聳える「雪龍垣山」[7]を自分たちの最高の聖山として崇めており、各集落あるいは各村には必ず固有の神山が設けられている。「シピ」の経典には、各集落の神山と山神の名称が並記されており、村全体で行われる祭りの時にはそれが読み上げられる。大蒲渓の場合は、集落のすぐ後方の山を村の神山「バリュジュケ」として崇め、豊作や住民の安全などへの神の加護を祈ってきた。そして山頂には高さ約２メートルの石塔「ラヘシ」を作って白石「ウルピ」を安置し、さらにその「ラヘシ」を、山頂と廟を結んだ線上に位置するバリュジュケ山の麓や各家屋の屋上にも設けた。神は「ラヘシ」に沿って、天→山頂→山麓→廟→それぞれの家屋の屋上へと来臨し、各家庭の屋上にあっては家の神として家人を保護すると信じられた。しかし中華人民共和国の宗教政策のもとではこのような信仰は否定され、大蒲渓においても家屋の屋上や麓の「ラヘシ」が壊され、1980年代前半までは「シピ」の活動も禁止されていた。現在では、廟が修復され、神々も高さ20センチ余りの木像に作り直されたが、白石が再び家屋の屋上や神山の麓に復活することはなかった。

大蒲渓からさらに南西へ800メートル、10分ほど斜面を上ったところに戸数22戸、人口124人の大寒寨がある。大寒寨は、大蒲渓の韓姓や王姓の集団におくれてこの地にたどりついた楊姓や祁姓の一族が大蒲渓から分かれて開いた集落である。家屋群は１ヵ所に集中しており、楊姓と祁姓の２つの「火墳」がある。水源は２ヵ所ある。廟が１つあり、毎年７月７日、８月15日、２月２日に村全体で神をまつる。古老の語るところによれば、1940年代には全戸数はわずか７戸で、余、左、楊の姓があった。耕地は少なく、余姓と左姓が

比較的広い耕地を所有した。楊姓はほとんど土地を持たなかったが土地を借りることはなく、食糧の不足は主に漢方薬材を採集して薛城鎮まで売りに行って補った。なお耕地の絶対的な不足は現在も同様であり、1983 年に人民公社が解体された時の 1 人あたりの分配も 1 畝弱にすぎなかった。

大寒寨から急な山道を南西方向へさらに 1 時間ほど上ると家屋が点在し、小火地寨が見えてくる。1993 年に 16 戸、80 人であった小火地は、2001 年には 7 戸 52 人に激減した。小火地寨は 20 世紀にはいって蒲渓と休渓の両村からの移住者によって形成された集落である。しかし火地の名称のとおり、山野の樹木を伐採して焼き、畑にした土地であるため、耕地条件は劣悪であり、高度も 3000 メートルを越えているために気候は大蒲渓よりも一層寒冷である。そのため現在においても食料の完全な自給が困難であり、3 月から 5 月までの 3 ヵ月分の食糧を外部から購入しなければならない。

2．蒲渓村の形成

（1）　民国時代の蒲渓村

村の古老である王定相（67 歳）、王久清（75 歳）、韓世竜（72 歳）らによれば、民国時代の村の様子はつぎのようであった。

民国時代、蒲渓十寨は県政府の直轄下にあり、「保甲」が設置されていた。蒲渓村は、山むこうの休渓村とともに同じ「保」に属し、保長は、当地で最も財力と勢力を誇っていた韓家の韓廷玉が県政府によって任命された。保長の主な仕事は徴税であり、その税率および徴収はすべて保長の裁量にまかされていたが、平均して畝あたり 4～5 斤の穀物が課された。「保」の下には集落ごとに「甲」がおかれ、甲長は住民により選ばれた。

王久清が幼い頃、村には 2 人の地主がいた。韓姓の廷玉、廷芳の 2 兄弟である。韓家は大蒲渓と半坡に村全体の半分にあたる約 100 畝の耕地を所有し、常に 2～3 人の雇い人（「長工」）がいた。雇い人は、外地から来た漢族や土地を持たない地元民（当時は 3 人いた）で、2～3 年単位で雇われ、年に 14 両の銀が支払われた。住民の大部分はそれぞれ幾らか自分の土地を持っていたが、ほとんどがさらに地主から土地を借りて生計を立てていた。借料は、1 畝につき 3 斗（約 80 斤）であった。その頃の畝あたりの収穫量は 200～300 斤であったから、およそ収穫全体の 30～40 パーセントを納めていたことになる。

村でアヘンの栽培が始まったのは 1945 年からである。当時、隣のギャロン・チベット族地区や大部分のチャン族地区は、南のイ族の大涼山地区とならぶアヘンの大産地となっていた。漢族商人はギャロン・チベット族地区の小金や大金からケシの種子をもちこんだ。ケシの栽培はまたたくまに広がり、最盛期には大蒲渓で耕地面積の約 60 パーセントに及んだ。河壩村に彼らが建てた城隍廟では定期的にアヘン市が開かれ、1 両のアヘンは銀 8 元